

此廣告を見取引の御方「本日名所圖繪」に廣告の御旨附記



此美人の持てる寶丹の匙はおのづから十徳を具へて其便利いふばかりなし、そは服藥の用を爲すは固り云ふを埃たず、かみざし、耳かき、小湯枝、菓子箸、筋たて、火箸、湖へち、爪をうじ枝折等に活用せらる、また裏面に刻せる妙の一字には千萬無量の徳あれども盡しがたければ略しぬ 木花園

此匙は金三十錢以上の寶丹に添て贈呈す

寶丹を少量なりとも時々服用せば口中を清め、胸をすかし、心身ともに爽快を覺ゆること疑ひなし、主治としては頭痛、眩暈、腹痛、下痢、四季の感冒を始め其他の諸症に効驗ある事は今更に云ふ必要なし、これは既に實驗者諸賢の御確認あらせ玉ふ所なりと信ずればなり

寶丹 家庭用……金一圓 金二圓 金三圓
 懷中用……金廿錢 金卅錢 金五十錢
 定價 御試用……金十錢



東京上野之地端仲町 寶丹本舖守田治兵衛

新撰東京名所

第六十三編

深川區之部

其二

大日本名所圖會

第六十四編

東陽堂發行

大日本名所圖會第六十四編目次

大日本名所圖會第六十四編目次

◎新撰東京名所第六十三編

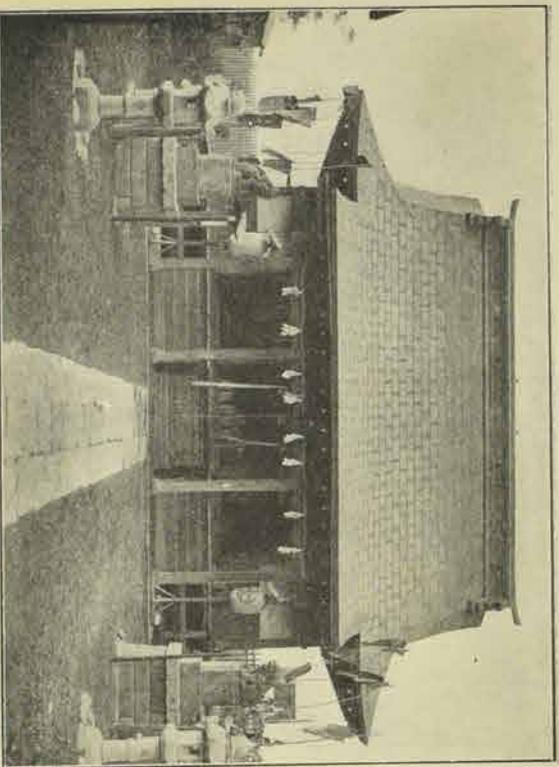
◎深川區の部 其二

- 深川越中島町、位置及區域、町名の起原并沿革
- 深川井野町、位置及區域、町名の起原并沿革概況
- 陸軍練武隊
- 越中島橋
- 越中島
- 商船學校
- 水産講習所
- 工業試験所
- 相生橋
- 深川古石場町、位置及區域、町名の起原并沿革
- 金刀比羅神社
- 市街鐵道會社發電所
- 葛岡除染の風景
- 深川平久町、位置及區域、町名の起原并沿革
- 深川洲崎町、位置及區域、町名の起原并沿革
- 洲崎神社、境内の概況及現況
- 洲崎原○洲崎の初日出
- 深川入船町、位置及區域、町名の起原并沿革
- 入船橋
- 深川島田町、位置及區域、町名の起原并沿革
- 深川木場町、位置及區域、町名の起原并沿革
- 深川芝森町、位置及區域、町名の起原并沿革
- 島田橋
- 敷井氏ノ老松
- 深川扇町、位置及區域、町名の起原并沿革
- 深川綱歩町、位置及區域、町名の起原并沿革
- 深川大和町、位置及區域、町名の起原并沿革
- 大和橋
- 深川龜久町、位置及區域、町名の起原并沿革
- 龜久橋
- 深川冬木町、位置及區域、町名の起原并沿革
- 養魚試験所

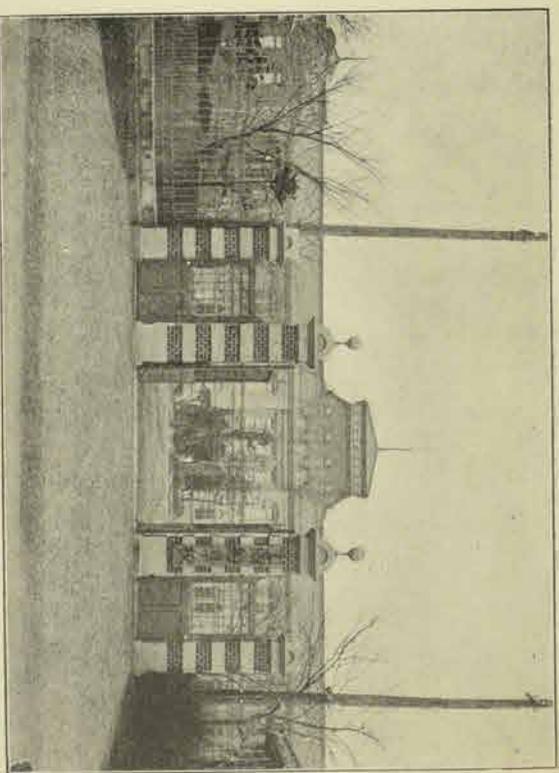
- 冬木辨財天堂
- 紀文家附の手洗鉢
- 深川和合町、位置及區域、町名の起原并沿革
- 深川鎮住町、位置及區域、町名の起原并沿革
- 法樂院
- 玄徳寺
- 心行寺
- 陽岳寺
- 正覺寺
- 東光寺
- 淨林寺
- 海福寺○地名土若田郎の由緒○採茶庵の址
- 深川萬年町、位置及區域、町名の起原并沿革
- 直助屋敷
- 海邊橋
- 深川清住町、位置及區域、町名の起原并沿革
- 清住町の遺
- 專修局事務所
- 鹽運院
- 種野セメント合資會社
- 深川伊勢崎町、位置及區域、町名の起原并沿革
- 岩崎家別邸
- 深川西平野町、位置及區域、町名の起原并沿革
- 深川警務署
- 深川女學校
- 深川東平野町位置及區域、町名の起原并沿革
- 吉岡橋
- 東西平野町の概況
- 深川山本町、位置及區域、町名の起原并沿革
- 深川龜崎町、位置及區域、町名の起原并沿革概況
- 深川區役所
- 龜崎町尋常小學校
- 淨心寺

- 本立院清正公堂并寶物
- 芽出多松
- 法禪寺
- 鹽澤寺
- 松平樂翁公墓
- 本多忠統墓
- 諸大名の墓
- 雲光院
- 深川吉水町、位置及區域、町名の起原并沿革
- 要橋●青海橋●富島橋
- 深川久永町、位置及區域、町名の起原并沿革
- 深川島崎町、位置及區域、町名の起原并沿革
- 副永橋
- 深川三好町、位置及區域、町名の起原并沿革
- 深川西永町、位置及區域、町名の起原并沿革
- 深川元加賀町、位置及區域、町名の起原并沿革
- 泰節寺
- 深川扇橋町、位置及區域、町名の起原并沿革
- 深川區内有名の墳墓
- 深川古石場町堤上の眺望
- 海福寺●鹽澤院●木場●芭蕉庵
- 寫眞
- 商船學校●相生橋●琴比羅神社●陸軍練武隊●洲崎神社●深川警察署●洲崎神社境内陸光塔●木場●陽岳寺●伏見義民之碑●正覺寺白衣觀音堂●冬木辨天堂●法樂院●淨心寺●本立院清正公堂●開宮林藏之墓●本立院庭内芽出多松●鹽澤寺●深川區役所●松平樂翁公墓●本立院内清正公遺物
- 雲光院●種野セメント工場●鹽運院●岩崎別邸●專修局事務所

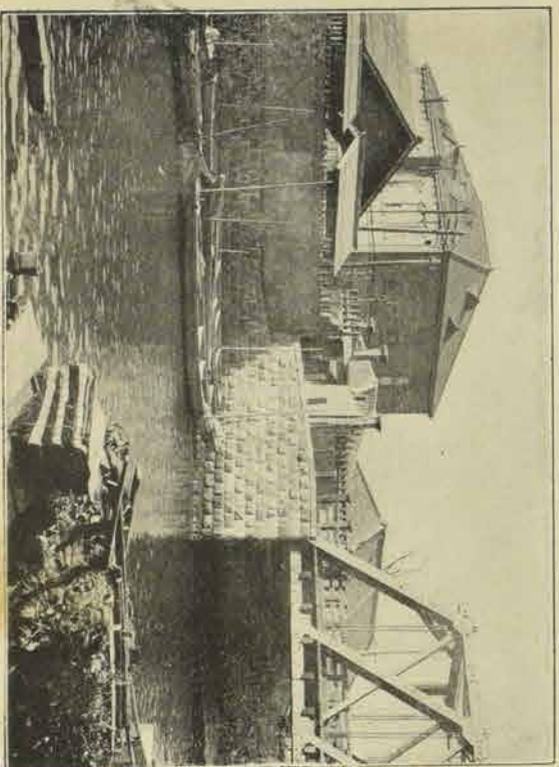




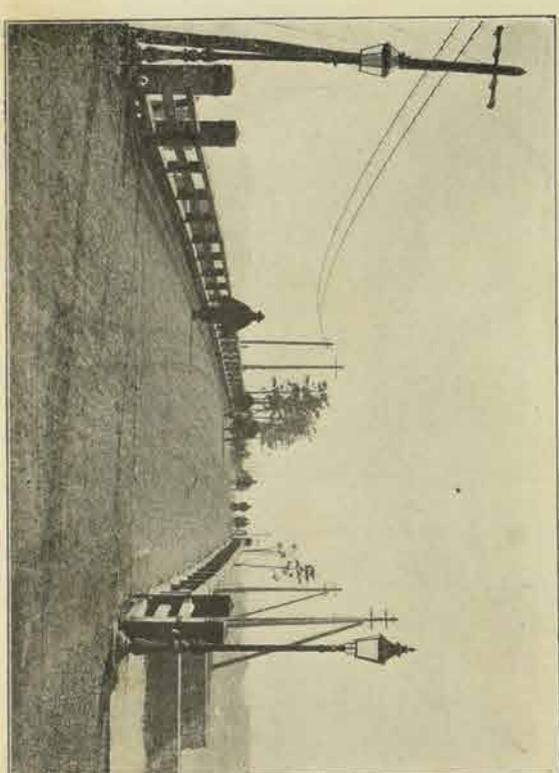
社神羅比琴



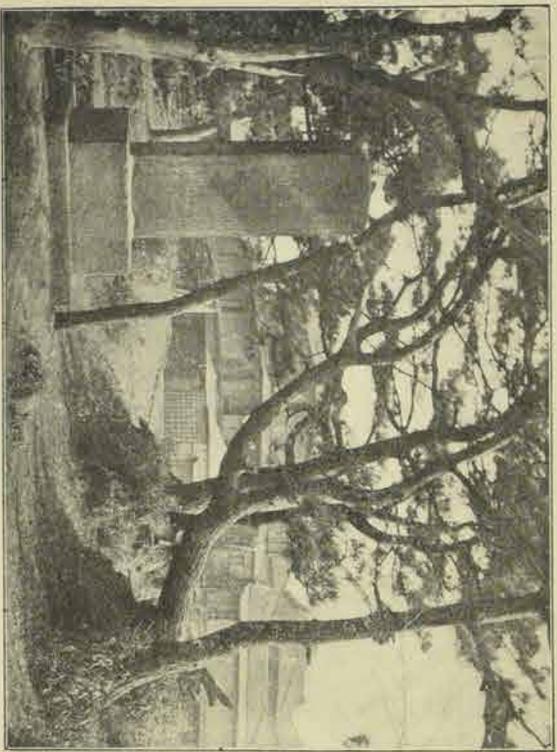
校學船商



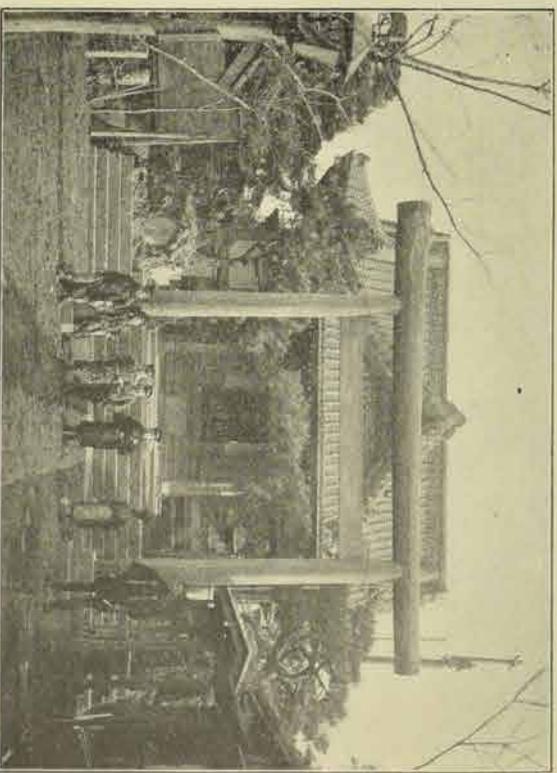
廠林糧軍陸



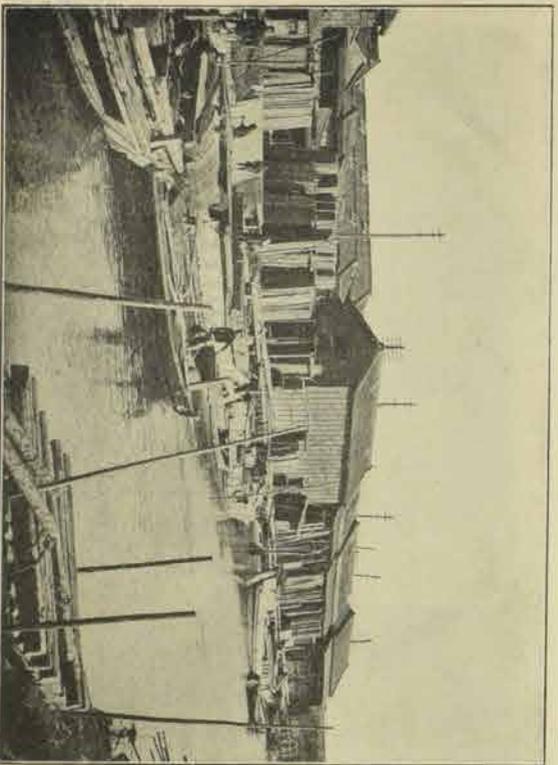
橋生相



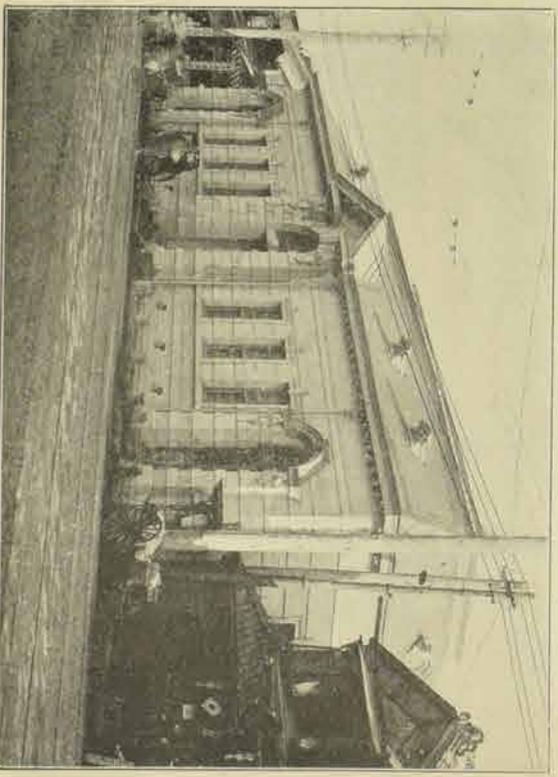
洲崎神社境内光碑



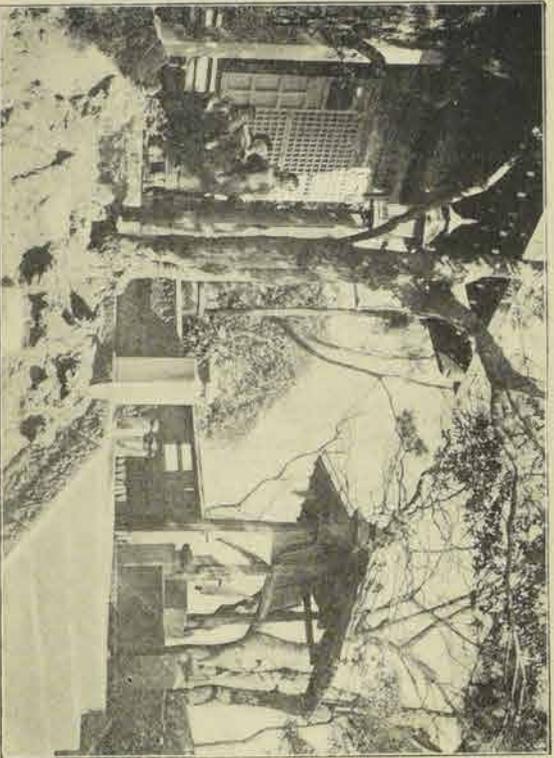
洲崎神社



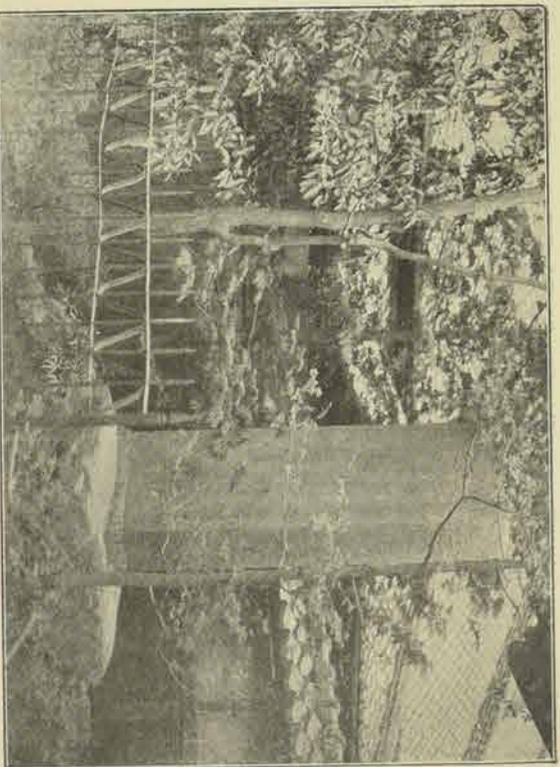
木場



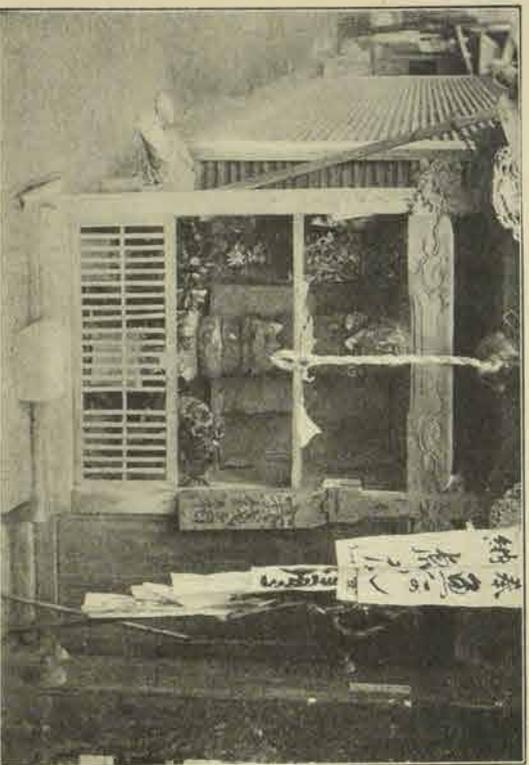
深川警察署



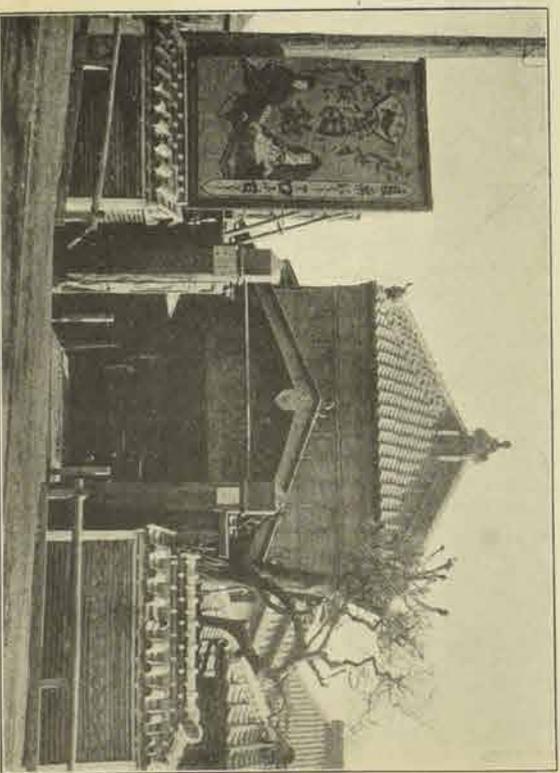
冬多木辨天堂



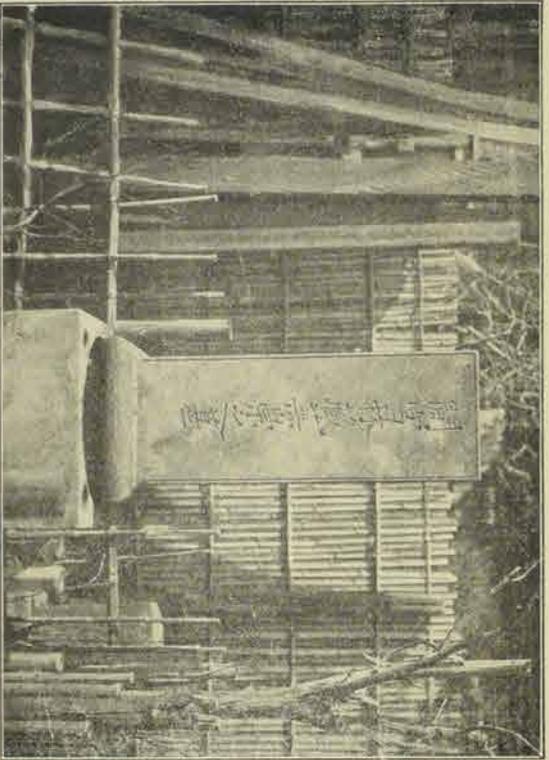
陽岳寺伏見義民之碑



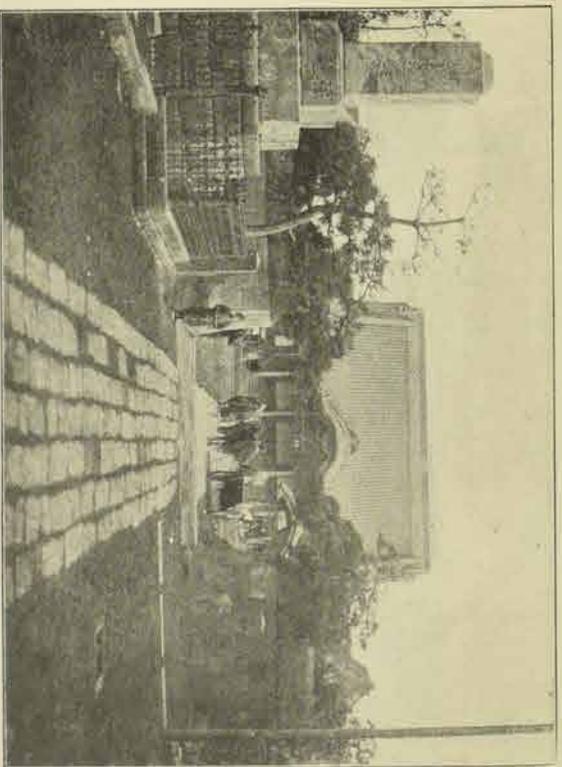
法乘院鹽ノ地



正覺寺白衣觀音堂



墓之藏林宮間



寺心淨

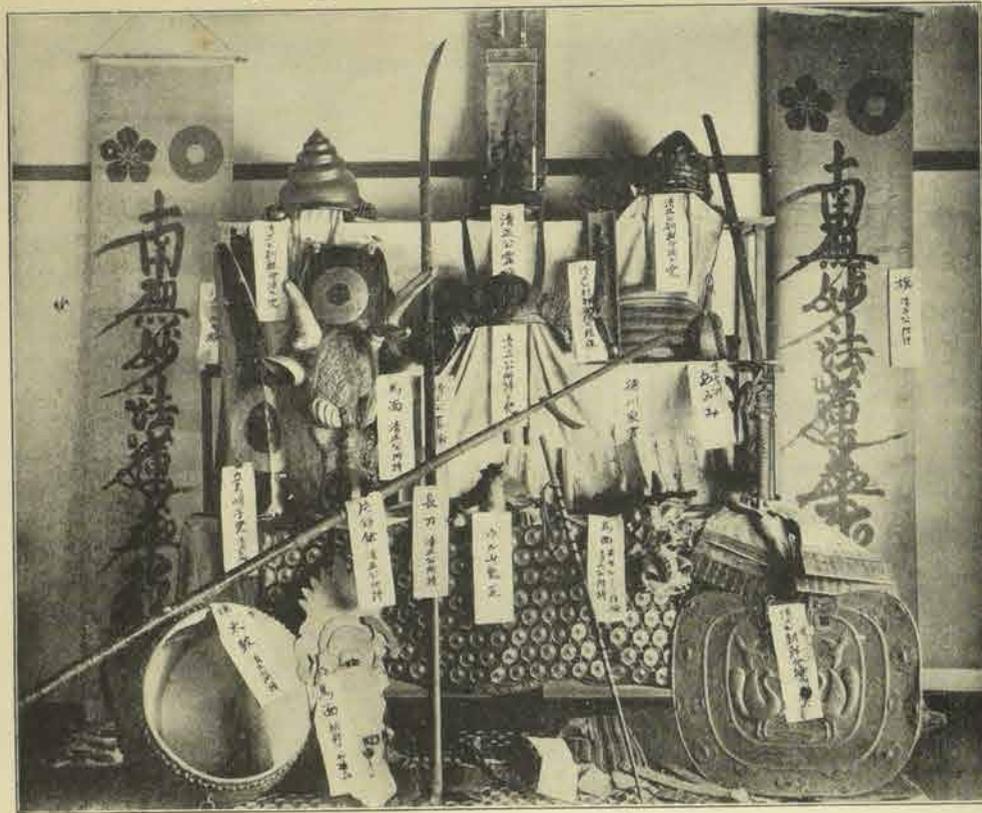


松多出目内庭院立本

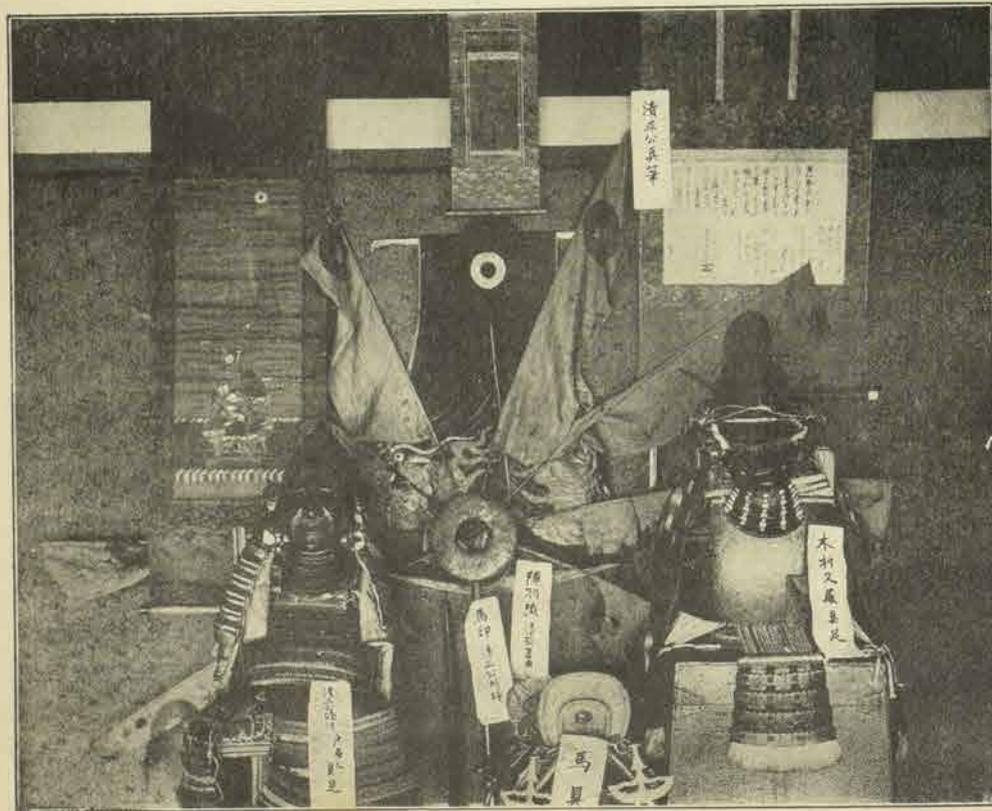


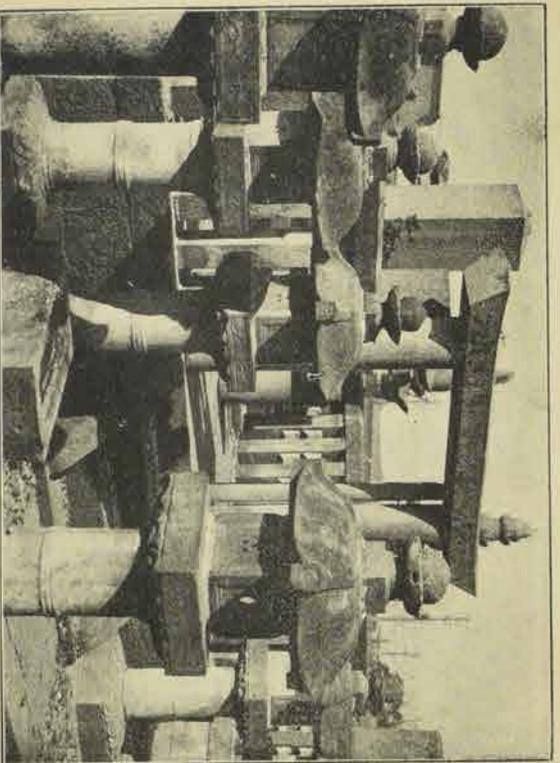
堂公正清院立本

物遺公正清内院立本

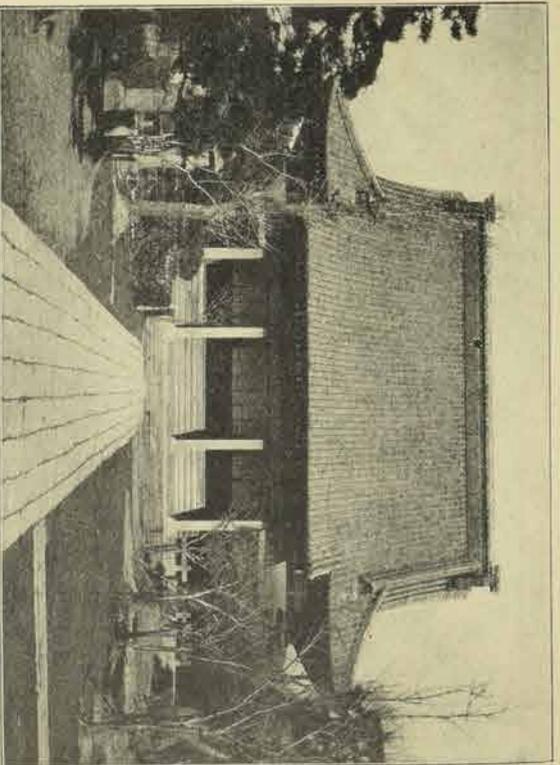


上 同

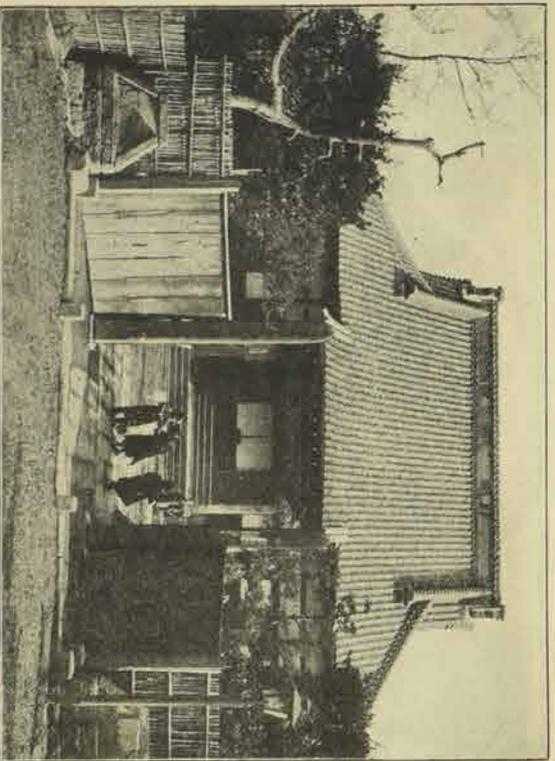




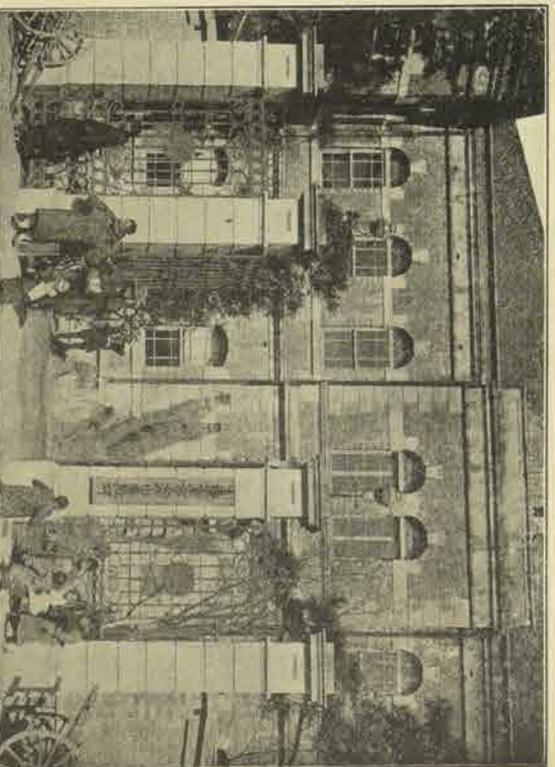
墓公翁樂平松



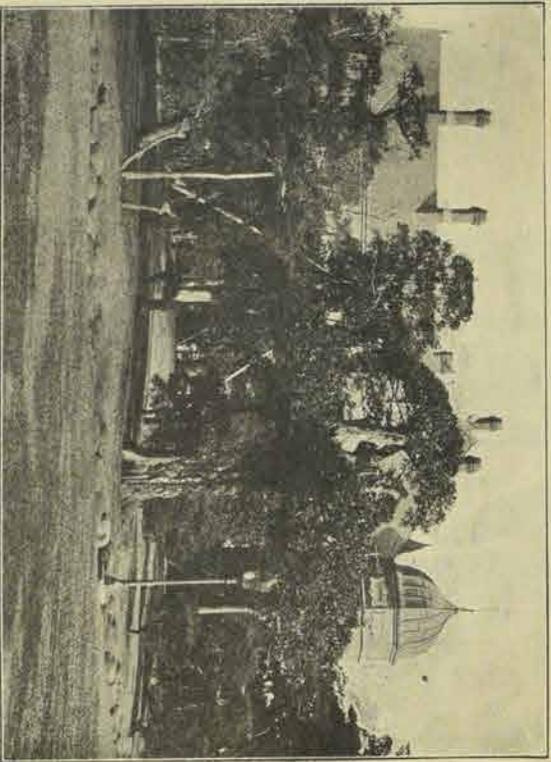
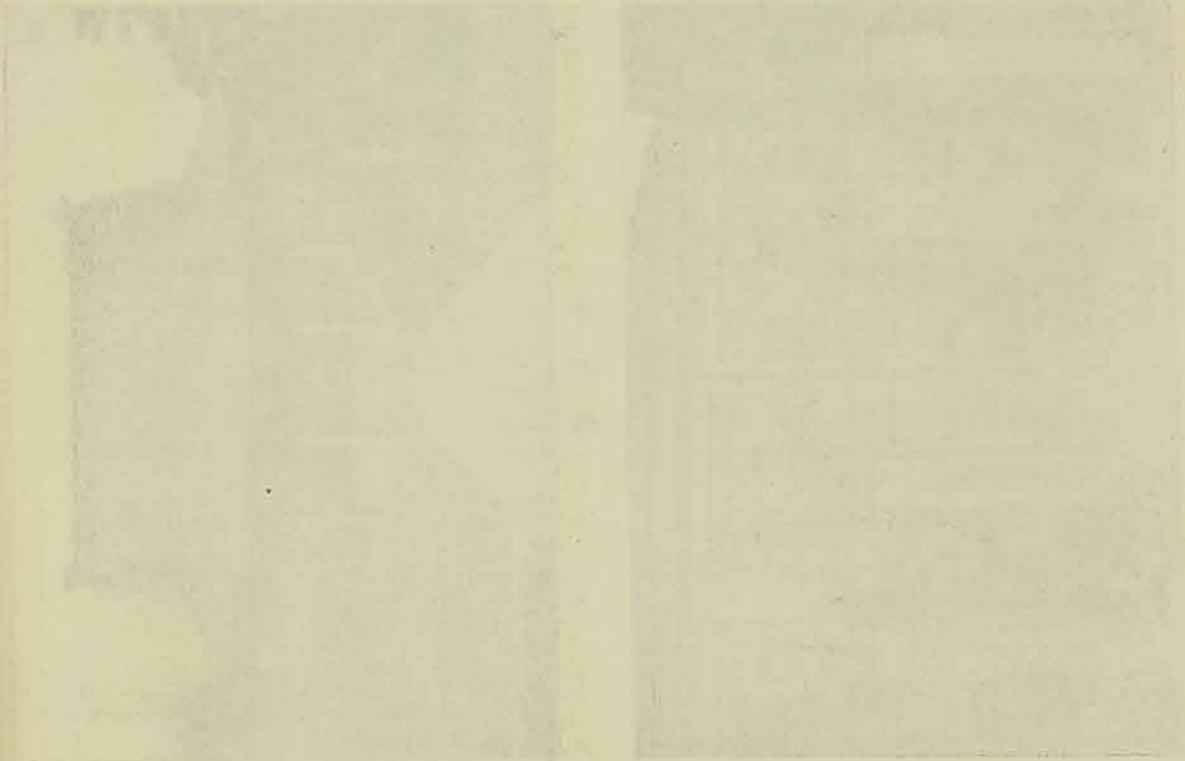
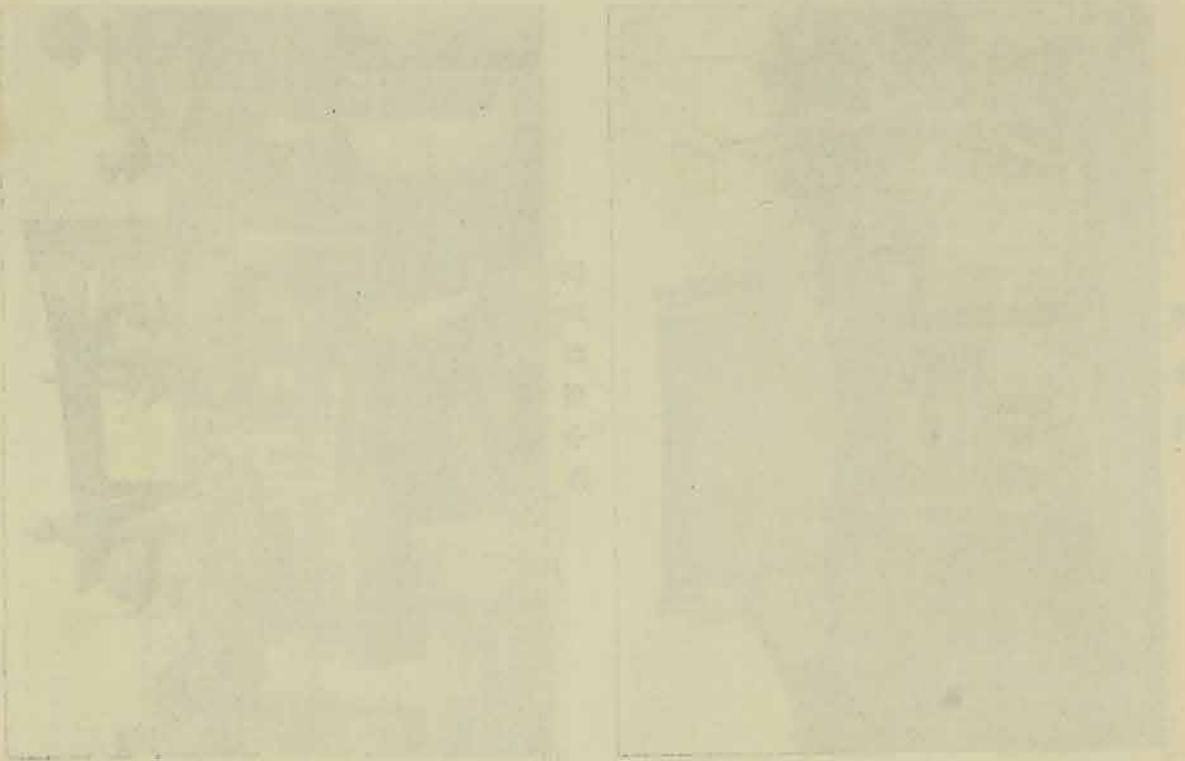
寺岸靈



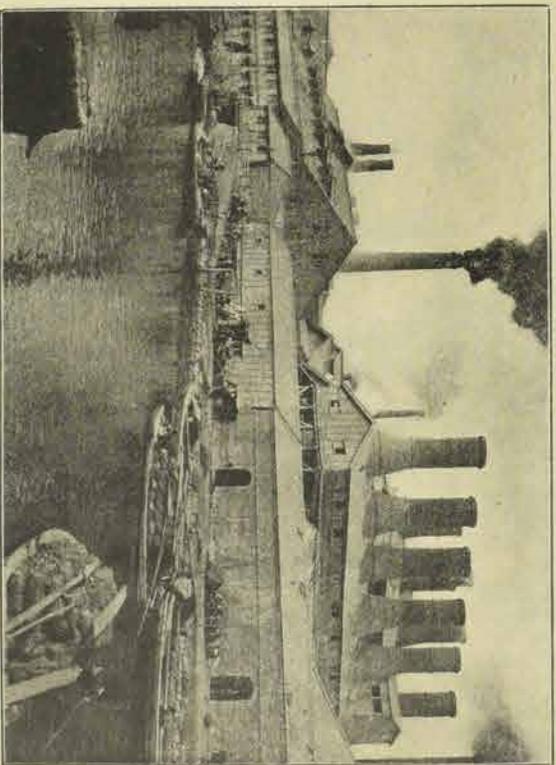
院光雲



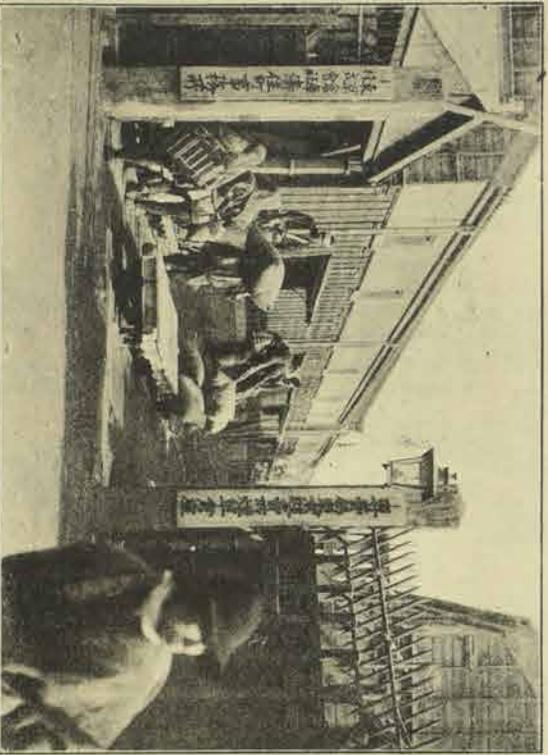
所役區川深



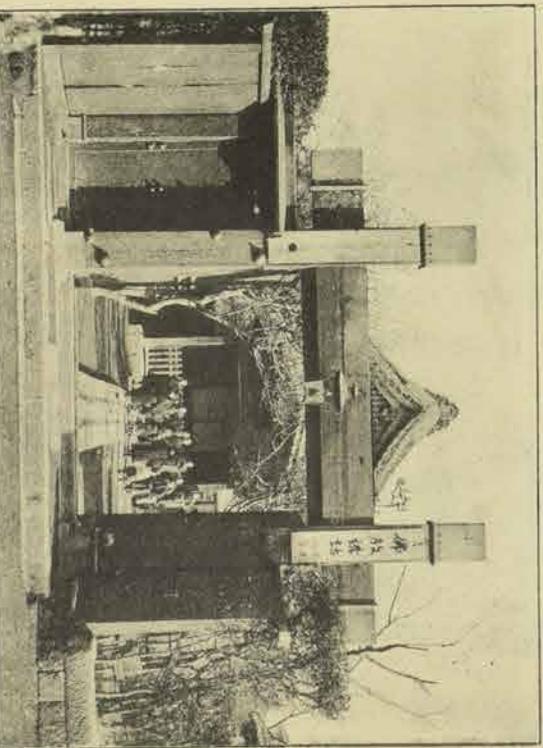
岩崎別邸



淺野ノソン工場

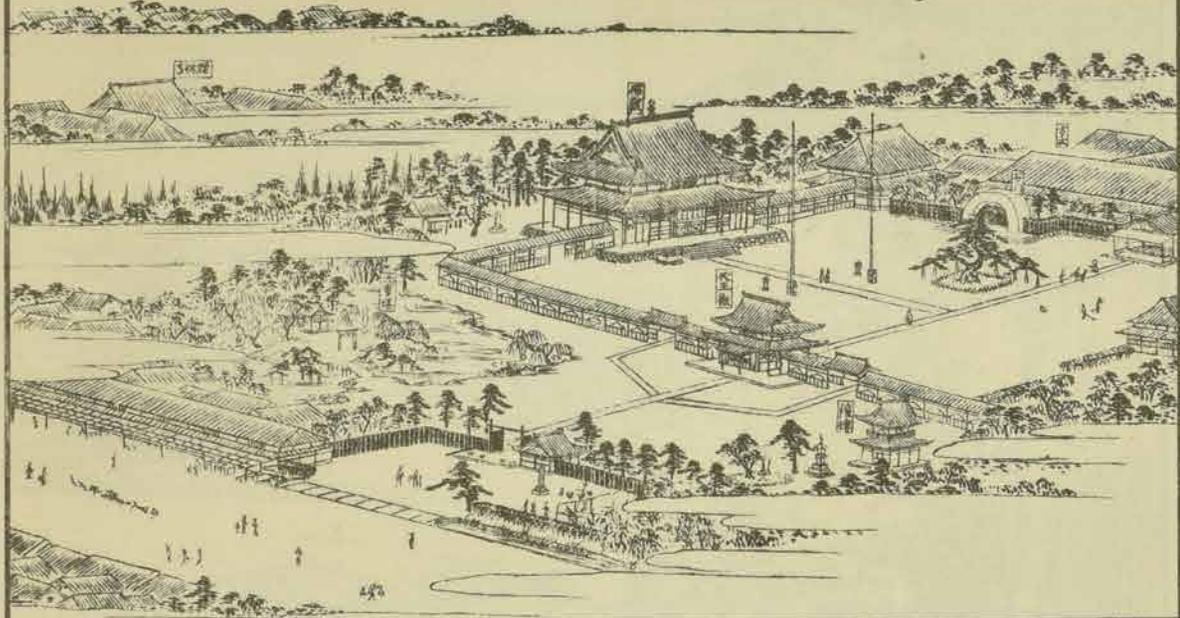


專賣局事務所

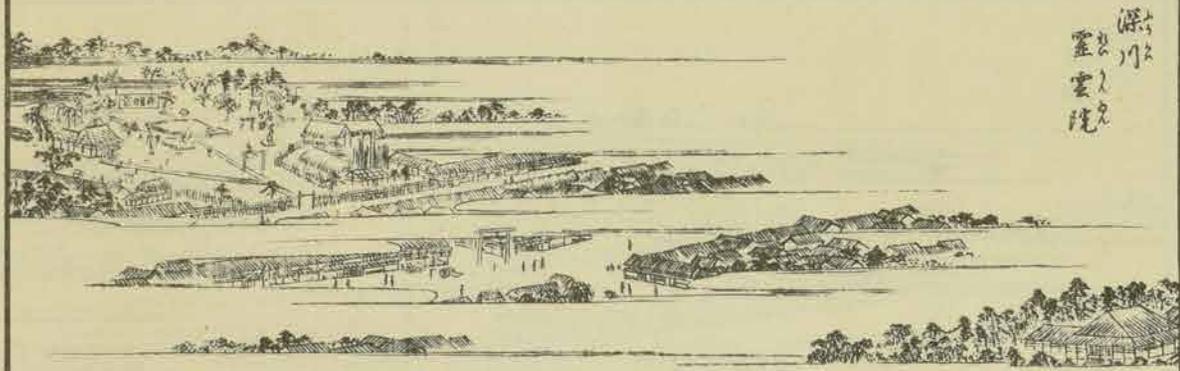


靈運院

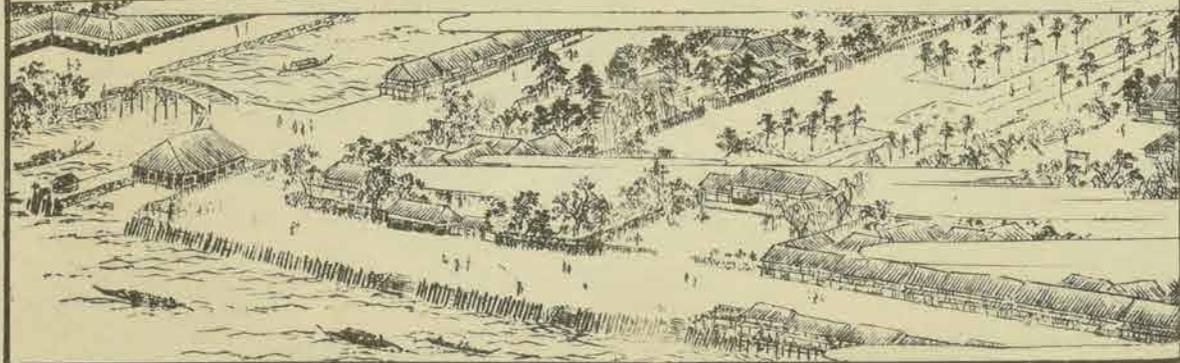
満福寺
武田信玄の
持つた
石の橋
新田の
舟
の



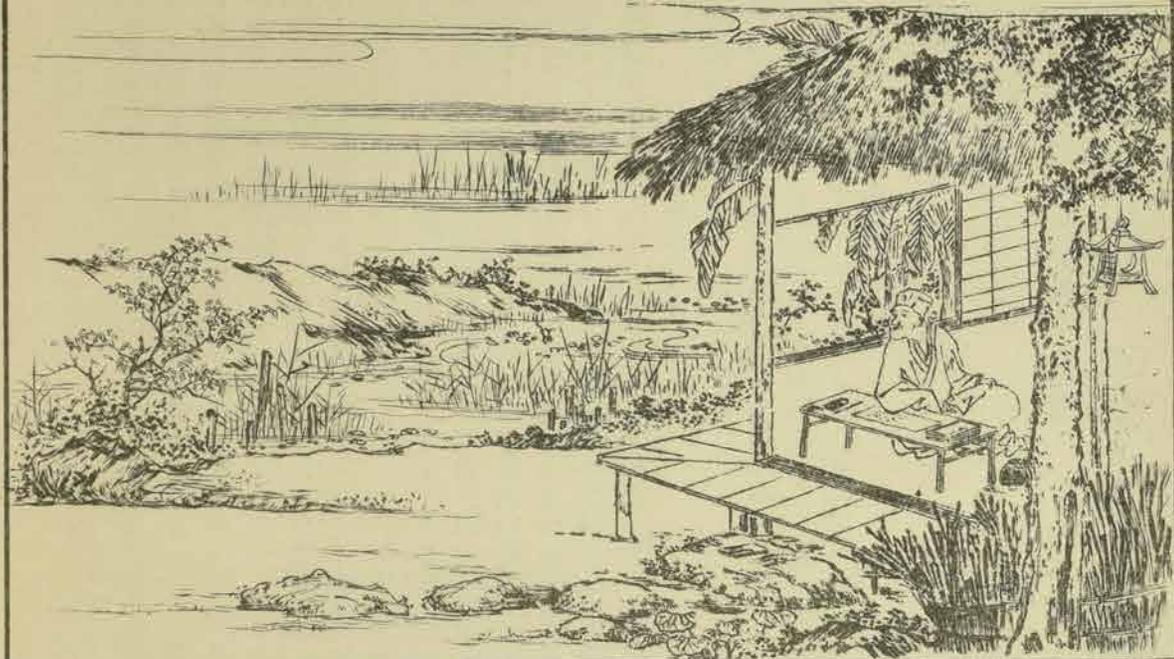
深谷
聖雲院



深谷

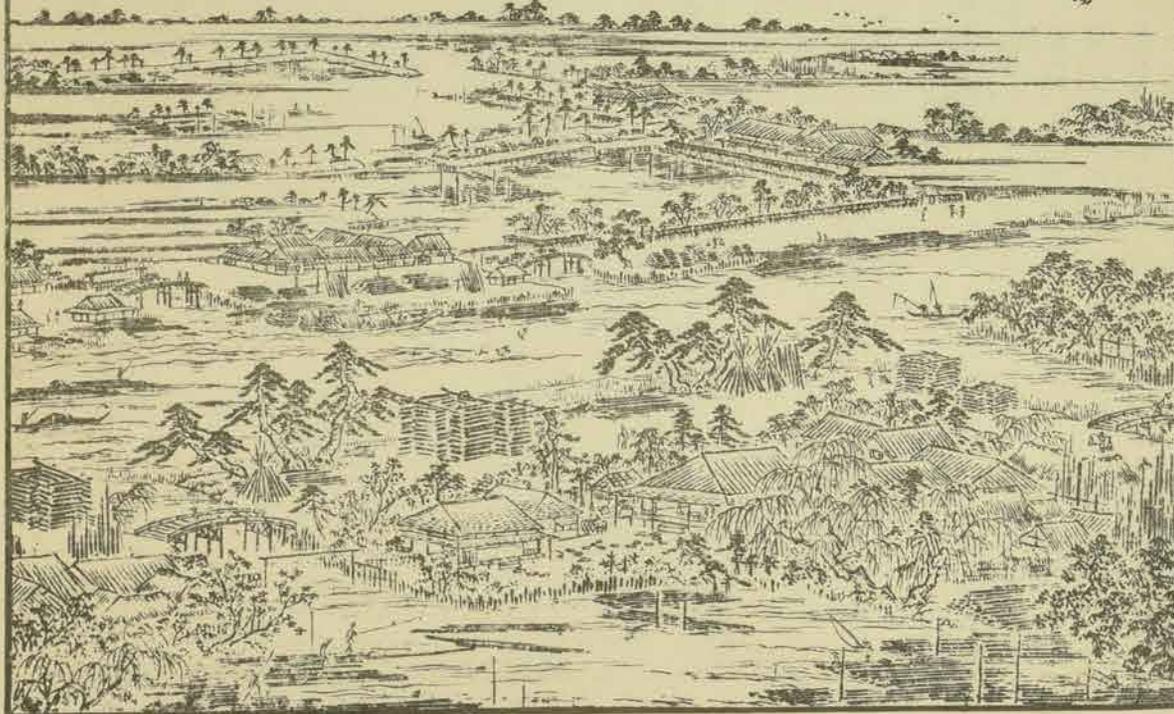


芭蕉庵
古依や
花 陸
よの
音
桃音



橋本
茶場
わじ
麻
さ
ま
ま

深川
木場



大日本名所圖會第六十四號目次明治四十二年二月二十日發行

○新撰東京名所第六十三編

深川區の部其二

●深川越中島町

◎位置及區域

深川越中島町は。越中島の西北に在りて。東は稍々三角形を爲し。古石場町に接し。西は直ちに大川に枕み。南は越中島に連り。北は大島川に限れり。要するに越中島の一部分なり。土地の番號は一より八に至る。

◎町名の起原并沿革

深川越中島町は。變革一ならず。東京市案内之を記して云。昔時は海中の小島なりしといふ。明曆萬治の頃榎原越中守の別墅となり。因て越中守といふ。後ち風浪の爲め島地崩壊して上地となり。石置場に充らる。寛文二年六月再び島地は大島町代地に給せられしが。猶海水漸浸して家屋を設る者なく。元祿中大川を疎し。土破を此地に置くに及びて粗く舊形に復したり。正徳元年幕府之を家人の屋敷に給し。此時越中島町と稱す。尋で大島町代地亦商家を建つ。享保六年因藩町の商人請ふて舊石置場を填築し。町家を開きて越中島借地と呼ぶ。當時越中島町邊を里俗古石場。此地を新石場と稱せり。十九年神田三河町永井町等の商人又其西南海岸を填めて商家を設け。其小石川養成所費用補償の爲めに開發したるの故を以て養成所助成地と稱し。又築出新地とも云ひ。寶曆六年僧曾融越

中島の商平助と謀り。町の東南洲嘴を墾し。之を越中島新田と名く。里俗之を曾融新田とも呼べり。文化九年藤右衛門なるもの。新田の南數町を開きて藤右衛門請地と呼ぶ。寛政二年には幕府命じて大島町代地及本町の南岸を填築せしめ。之を人足寄場の屬地とす。文政五年平助又新田の西岸を開發して平助請地とす。之が爲め本町は殆ど新開地及諸町の中に包まらるゝに至れり。而して本町及大島町代地を除くの外は。是より先土地或は諸藩の抱屋敷となり。賄組屋敷、定役屋敷上納地等の設けありて變革一ならず。此の如くにして享保以後海岸を填築し。田圃或は町地となるもの四萬餘坪に及ぶ。天保十三年本町其他諸町土地となり。安政二年土地及越中島新田海邊新田、忍藩別邸の内、及海岸洲渚等を合して訓練場とす。四年又大島町代地并に忍藩別邸を收め。文久三年之を訓練場に合せり。明治元年軍務官所管となり。七年舊越中島町大島町代地の東邊を割きて。更に越中島新田代地に給し。其他は今の町名を加へしが。八年全く陸軍省用地となり。廿四年三月越中島新田を加ふ。

●陸軍糧秣廠

陸軍糧秣廠は。越中島町三番地に在り。戰時の用に供する糧秣の調辨、製造、貯藏、補給等の事を掌り。且つ糧秣に係る試験を行ふ所にして。現廠長は梶塚銅太郎氏なり。當廠の入口に練兵橋あり。人をして練兵場たりし舊事を回想せしむ。

●越中島橋

越中島橋は。市設にして大島川に架し。越中島町と大島町とを連絡す。長十三間、幅三間あり。創架年月詳かならず。現在のものは明治三十五年七月の換架に係る。

●越中島

越中島は。深川越中島町の東南に續ける廣漠たる土地なり。もと海岸の寄洲にて。永代浦の海に瀕し。當區の南西角たり。今も相生橋の東に商船學校、水産講習所、工業試験所の三大建築あるのみにて。其の他は尙ほ原地たり。

●商船學校

商船學校は我邦唯一の海員養成所にして。航海及び機關に係る高等の學術技藝を教授する學校なり。本校は明治八年の創立にて。三菱商船學校と稱せしが。同十五年に至り官立學校と爲し今の名に改む。當時は農商務省の所轄たりしが。同十八年遞信省の所管に移れり。校長は平山藤次郎氏にて。生徒凡そ五百名あり。科業は左の如し。

| | | | |
|-----|------|------|--------|
| 航海科 | 課程六級 | 修業年限 | 五ケ年六ヶ月 |
| 機關科 | 課程五級 | 同 | 五ケ年 |

入學者の學力は中學卒業程度にて。無試験入學の特典あり。生徒を自費、貸費の二種に分てり。

●水産講習所

水産講習所は商船學校の東隣に在り。水産に關する學理、技術を講習する所にして。大日本水産會設立の水産講習所を繼續せしものに係る。明治三十年之を官立とし。農商務省の所轄に屬す學科等は左の如し。

| | | |
|-------|------|-------|
| 本科 | 修業年限 | 三ケ年 |
| 遠洋漁業科 | 同 | 同 |
| 研究科 | 同 | 二ケ年以内 |
| 現業科 | 同 | 一ケ年以内 |

學科實習科目 漁撈 製造 養殖

校舍はもと芝區三田四圓町に在りしが。事業を擴張する爲め。三十六年今の地に移し。又漁撈科假實習場を千葉縣安房郡館山、製造科實習場を神奈川縣小田原町、養殖科實習場を當區冬木町、府下北多摩郡宮澤、栃木縣日光中宮洞湖に設置せり。現校長は理學博士松原新之助氏にて生徒凡そ二百名あり。

●工業試験所

工業試験所は。水産講習所の東隣に在り。工業に關する試験分析及び鑑定を掌る所にして。農商務大臣の管理に屬す。現所長は工學博士高山甚太郎氏なり。

●相生橋

相生橋は大川の派川に架し。越中島より京橋區新島に連絡す。木製にて長八十一間一ヶ所、二十九間一ヶ所の二段に分る。明治三十年三月の新設なり。

●深川牡丹町

◎位置及區域

深川牡丹町は。大島川の南岸に在りて。其の東は佃町に連り。西は大島川の支川に界し。南は道路を隔て、古石場町に對し。北は總て大島川に枕めり。土地の區劃は一より十一に至る。

◎町名の起原並沿革

深川牡丹町は。もと海邊新田の内に在りて。海岸埋築の地なり。稱して海苔干場といふ。明和六年十月本所茅場町二丁目代地。深川南松代町代地と爲り。明治二年之を合して今の町名を附す。當地に牡丹を栽培する者多く居住せしに因る。一時郡部に屬せしが。後ち市に復す。同五年松平阿波守(舊德島藩)の別邸を併合せり。

◎概況

當町は過半下屋敷の跡なるを以て市店は新設のもの多し。一番地に襪襪販賣合資會社(製紙原料を買收す。三十年四月設立)伊勢屋工場(刻昆布を製す。十六年設立)あり。

●深川古石場町

◎位置及區域

深川古石場町は。越中島の北に在り。東西に延長せる市街にして。東は埋立地に對し。西は屈曲して大島川に臨み。南は斜めに越中島に界し。北は平富町、佃町、牡丹町に沿ひ。大島川の支川其の北部を貫通せり。土地の區劃は疎大にして一番より二十七番に至る。

◎町名の起原並沿革

深川古石場町は。元海邊新田飛地字古石場、元久左衛門新田

●金刀比羅神社

飛地古石場、元龜戸村飛地古石場を併合したるものなり。明治二十四年三月新に今の町名を附したり。蓋し海邊新田飛地は。初め海苔干場と稱せしが。風浪の災害に因り家屋を建るを禁止し。安永七年見取場とし。寛政十一年本田に加へしもの。久左衛門新田飛地は。寛政七年久左衛門新田の中松平伊豆守の抱地となりたる時其の代地に給與せし者に係る。

●市街鐵道會社發電所

市街鐵道會社發電所は。當町二十一、二番地に在り。即ち琴刀比羅神社の隣地なり。黒色の大煙突天を摩す。

●舊潮除堤の風景

當區の海邊に在りて風景佳絶の處は。もと洲崎の原即ち今の平久町なりしが。明治以後市街となり。今は其の前面に埋立地ありて。海と隔りたれば。其の趣昔時に異なり。現今風景の佳絶なる處は。古石場町の舊潮除堤とす。此隄路は高くして。東西に延長し前は渠水即ち一條の入江を隔て、越中島全體を俯瞰し。直下は大藏省所管に係る八萬坪

餘の蘆葦及び雜草地にて。其の先は商船學校、水産講習所、工業試驗所の新築なれば。展望を妨げず。殊に其の東端に至りては景趣益々佳。永代浦一望の中に在り。東南には總房の諸山翠黛を浮べ。西方には富岳の遠く素雪を戴けるあり。蒼波渺々の間白帆相往來し。品川の舊砲臺呼べば則ち應へむとす。釣船繫ぎて多く岸に在り。棹して以て釣るべし。

●深川平久町

◎位置及區域

深川平久町は。一丁目、二丁目に區分し。長帶を成して東西に延長せる支街なり。其の東は洲崎町に對し。西は大島川に枕み。南は渠水を隔て、埋立地に沿ひ。北は辨天前河岸を擁して。大島川の下流に限れり。

一丁目は官有地にて土地の番號なく。二丁目は一、二番あれども。其の二を缺きたり。

◎町名の起原並沿革

深川平久町は。もと久右衛門町の内に於て。商店櫛比せしが。寛政三年の風浪後。家屋を設くるを禁じ。空原とす。(洲崎の原の條參看)明治二年五月に至り。再び當町を設置し。今の町名を加ふ。

●深川洲崎町

◎位置及區域

深川洲崎町は。大島川の下流南岸の一隅に在る小市街なり。東は洲崎川に枕み。西は平久町に接し。南は埋立地に面し。

末社に豊川稻荷社あり。

江戸砂子に云。洲崎辨財天。八幡の東。別當海潮山増福院吉祥寺。護持院末

開基知足院隆光大僧正 元祿十四巳年起立

隆光僧正字榮春河邊氏なり。慶安巳丑二月八日生。元祿元年知足院に住し。二年を経て神田橋にうつり。護持院と號す。

新編江戸志に舊事茗話を引て云。往古此社は島の中にありて何を祭る社とも知がたし。元祿年中深津八郎右衛門正隆公命を得て。深川より此洲崎迄築立て陸地となすの奉行たり此社は島の中にあれば。辨天として然るべしと。深津氏命じて辨天社とする所なり。

貞雄補。元祿年中洲崎邊築立も。伊奈半左衛門、深津八郎右衛門兩人へ命せられしと見へたり。元祿十三庚辰年十二月二日の御日記に云。御代官伊奈半左衛門、御書院番酒井壹岐守組深津八郎右衛門兩人に金三枚時服二御羽織一ツ被下右は深川築地御普請出來に依てなりと。

境内の舊境

江戸砂子に云。當境内は海岸にさし出。ひがしは房總の遠山浪をひたし。南は羽田鈴の森。乾は江城うづたかく。いづれの山と問はざる高根の雪。北はつくばねのかすかにして。佳景の地なり。

△隆光僧正の碑あり。 △當門前茶店をば切名物なり

△三月汝干。此所にあそぶ。品川と同じ。

現況

北は道路を擁して大島川に對せり。土地の區畫は僅かに五番地あるに過ぎず。

◎町名の起原並沿革

深川洲崎町は。往時海岸なりしが。元祿の初之を埋築し。呼びて洲崎の原といふ。同十六年各主久右衛門官に請ふて。始めて市店を開設し。久右衛門町と命名し。一丁目二丁目三丁目に分ち。正徳三年閏五月市街に列す。寛政三年市店は風浪の爲めに漂失し。幕府乃ち石標を設置して。再び家屋を建ることなからしむ。同九年吉祥寺門前等の監守する所となり。稱して吉祥寺門前町といふ。明治元年改めて洲崎門前と稱し。二年五月に至り。洲崎社前江島橋通り以西を深川平久町とし。其の東を當町とす。當時一たび郡部に屬せしが。後ちに市に復せり。

●洲崎神社

洲崎神社は。深川洲崎町五番地一號に在り。村社にして市杵島比咩命を祀る。俗に洲崎の辨天と稱す。

本社は往昔海濱洲崎の中に在りて。其の祭神詳かならざりしに元祿の初幕府普請奉行深津八郎右衛門正隆公命を以て深川填築の際。神號を定めて辨財天の社と爲すといふ。

同十四年護持院大僧正隆光更に之を開基して。洲崎辨天社と稱す。別當は吉祥寺にて。護持院の末なりし。明治の初年今の社號に改む。

本社は五代將軍綱吉公の母桂昌院寄納せし銀製於迦美神一體藤原鎌足公畫像、菅原道真公畫像各一幅を藏す。

社前に警視廳の制札ありて。車馬を乗入る事、魚鳥を捕る事、竹木を伐る事を禁止し。又幕府より寛永六年に建てし石標(別項洲崎原の條に在り)を存せり。

神殿は數階高き處に在り。瓦葺素木造りにて。前面に龍の彫刻を施し。結構觀るべし。鳥居神樂殿もあり。關宿藩士川連虎一郎碑 明治二年秋八月田口文藏(江村)の選文を刻す。其の銘左の如し。

天閻黑分雨如塵、海立雷驚蛟龍喚、烈士魂慘不伸冤、既解兮魂亦往、載辭於斯屹煥炳、盍來遊風恬浪靜、題題塚 寶曆三年秋武江處士玉寶の建る所なり。

三夕碑 前面に左の三句を刻す。

秋は此法師すがたの夕かな

舟あふる筈屋の秋の夕かな

和歌の骨楨たつ山のゆふべ哉

碑の南面

何處にても悟れさう也秋のくれ

暑も霧にきえ行く秋のゆふべ哉

日は西に見えずく秋や峰のまつ

塵の世やしらて古人の秋のくれ

木々に錦發して秋はくれはどり

秋やよするさはなく浪の磯の風

碑の北面

秋そよく船の筈屋の夕けかり

聲なしに雁はゆく見ゆ秋の空

紅葉今やたくれなるも秋のもの

梅花翁 宗因

雪中庵 嵐雪

寶晉齋 其角

我蝶

宜秀

理山

花慶

素好

英珙

嘉峯

吳卿

儂里

獵もせず後世もねかはす秋の夕
秋か只夕まくれとて酒たゝそ
眺望の笑む大海の秋そきぬ

鹿笛 從一
五計

二併碑

文化十年癸酉中秋

花と見ぬものなきさとや百千鳥 清涯庵 稻塙
降る雪の見ゆるも雪のあかり哉 小麓庵 確嶺

雲煙道人碑 嘉永七年甲寅秋八月盤溪大槻崇選文、鑿溪筒井
憲篆額、雪城澤俊卿書

社の東方平地北位に左の碑あり
故僧録司隆公碑 隆光字榮春俗姓河邊氏云々の文を刻し。享

保十年歲次己巳夏六月七日龍山金地院比丘乾岩元雄選、代

隆公弟子立碑者龍湖三井親和とあり。筆者は親和なるべし。

併碑一基 側面に延享三丙寅三月求信樓主書とあり

雪にも似雲にも似るや春の花 野月狂人 茗荷坊吏山

神木楨
現今の地は砂子記する所とは大に異なりて。東南方に洲崎辨

天町并に埋立地あり。爲めに其の風景を變せり。干潮狩も亦

此處に於て爲すを得ず。

○洲崎原
昔時洲崎原といへるは。今の平久町一丁目二丁目及び辨天河

岸の地なり。府内備考に云。洲崎原は入船町の南海岸にそひ

たる處にて。東西の徑り二百八十五間、南北三十間餘りの原

なり。此地は元祿の始に築立し地にて。同十六年買受の年貢

(謄に云壁陸へ多く這上るは。津浪の兆也と此時既にしかりと

しへり。心得べし) 洲崎の地其後高浪の變計りがたしとて。

西は入船町限、東は吉祥寺門前に至るまで。凡長二百八十五

間餘の家居を取はらひ。畠地になし置る(此内西のかた入船

町跡は。澁江氏藥草栽培場となれり)

●洲崎の初日出
洲崎にて初日出を拜せむとて。新年元旦こゝに群集するもの

多し。鳥酔の句に「海近し朝日の」とは江戸の春「旭日噴々海

を出て赫灼たるに當りては。實に此感あり。

太平志に載する寺門靜軒の詩は。能く當時の實況を寫したる

ものなれば。左に之を掲ぐ。

天地一色黒濛々、四方難辨西乎東、潮聲前頭知海近、笑語

幾處認入叢、竿頭籠火招客、賣茶老媪賣餅翁、且賣
暖光燒束薪、一夕燒盡一林松、四民一席爭就熱、老少抱
光負海風、漁說陰晴農桑麻、劇談各自鬪舌鋒、中有
窮處士、自言我江都人氏、幼而學劍長讀書、陋巷樂道貧
不仕、吟詠近來玩光景、尋春探秋山又水、豈不
民與家無頃田、身未餓、君不見今早摺紳趨天朝、儀服
齊整拜歲始、庭燎未輝人捲潮、公卿門前馬如市、又不
見富人會計簿書中、一年今夜爲之紀、燈花落盡曉未眠、精
神索爾熱肝肺、之二者惡得斯遊、今日獲此唯我爾、東方
漸白開黑濛、青天貼水海雲紅、霜葦深邊樓鳥愕、宿櫓帆
飢漾洋中、碧瓦紅欄映波光、現出沙頭天女宮、多少酒樓
已有客、千金拉妓倚曉風、幫間一樣挾新纈、了鬢五色

地となり。その後正徳三年町並の御ゆるし有て久右衛門町と
いふ。軒を連ねたる町並なりしが。寛政三年高波の災にかゝ
りて。人家ごとくくおし流され。これが爲めに死する人多
し。よりにて釣命にて永く原野となさしめ。家居することをば
禁せられたり。今も吉祥寺の門前と入舟町の西とに禁制の石
標あり。中前書之通にて寛政六寅年より永く明地に被仰付
候御趣意に付町御奉行小田切土佐守様御掛りにて。右明地東
西へ高地面より六尺幅一尺四方之石傍に同七卯年五月八日御
建被置候御文言之寫左に申上候

葛飾郡永代浦築地

此所寛政三年波あれの時、家流れ人死するもの少からず、
此後高なみの變はかりがたく、流死の難なしといふべから
ず、是によりて西は入船町を限り、東は吉祥寺前に至るま
で、長二百八十五間餘の所、家居とり拂置、永く明地にな
しをかるゝものなり。

寛政六甲寅十二月日

武江年表に。此時に於ける風浪の變災を記して云。寛政三年
辛亥九月四日大嵐。昨夜中より大雨南風烈く。八月より強し
(是より先き。八月二十日暮前より雲出海鳴り。暮過より大風
雨。明七時止む) 已刻高潮深川洲崎へ漲りて。あはれむべし
入船町久右衛門町一丁目二丁目と唱へし。吉祥寺門前に建つ
らねたる町家。住居の人数と共に一時に海へ流れて行方を知
らず。辨才天社損し。拜殿別當所其外流失。其かへしの浪行
徳船橋鹽漬一圓につぶれ。民家流失す。其外諸方家屋吹損し
川々水溢る。晝時にいたり潮引く。關東筋すべて洪水あふる

裁香絨、高宴興酣春色動、今年之魚去年菘、時聞金銀攪
絲肉、拜日行者不二講、仰蒼穹、南無一口唱咒字、振
金摩珠濤洶々、乍觀陽谷洩妙光、雲飛朱雀波走龍、紅
影浴出一寸寸、金輪搖動氷將融、人々谷掌暗々禱、今年奇
福願無窮、孰知福者禍所倚、日月照物自至公、世人視
前不省後、天有春暖必寒冬、後邊笑者君知否、西方兀立
不二峯、

●深川入船町

◎位置及區域

深川入船町は。大島川下流の北岸に在り。四方水を環らし。
一區廓を成す。東は木場町に對し。西は仙臺堀の南支川に臨
み。南は大島川に界し。北は島田町に隣れり。入堀二ヶ所あ
り。土地の番號は。一より十三に至る。其中第八、九、十一
を缺きたり。

◎町名の起原並沿革

深川入船町は。往昔海岸の地なりしを。元祿十四年新築して。
市店を開設し。船舶集合の地たりしに因り。今の名を附した
り。正徳三年閏五月他と同じく町方の支配に屬せり。明治五
年に至り。細川若狹守、六角越前守、金田式部の邸地を併合
す。里俗に當町を下木場と唱ふ。

入船橋

八船橋は中ノ川支川に架し。入船町より島田町に連絡す。創
架年月詳かならず。

現橋は長さ七間、幅二間あり。明治三十一年の換架に係る。

●深川島田町

◎位置及區域

深川島田町は。大島川の北位に在りて。四方水を環らし。方形の一區廓を成したる市街なり。道路四周し。東は木場町に對し。西は仙臺堀の支川に枕み。南は入船町に隣り。北は油堀の下流を隔て、鶴歩町に界せり。土地を區劃して。一番地より十七番地とす。其の中第十、十一を缺きたり。

◎町名の起原並沿革

深川島田町は。入船町と同じく新築の地にして。元祿十五年始て市肆を開設し。町名を附す。蓋し町名は開設者の氏名ならむ。正徳三年閏五月市街に列し。明治五年に至り。内藤駿河守の下屋敷を併合せり。

●深川木場町

◎位置及區域

深川木場町は。仙臺堀の南位に在りて。最も廣濶なる市街地なり。東は大島川の下流に枕み。西は仙臺堀の南支川に界し。南は大島川を隔て、洲崎町並辨天河岸に對し。西は横堀を限りて。茂森町と扇町に臨めり。水路縱横に通し。十數の區劃あり。橋に縁りて往來す。土地の番號は一より三十に至る。

◎町名の起原並沿革

深川木場町は。當區に於ける有名なる土地にして。もとは海岸の斥鹵なり。元祿十年之を埋築し。材木商多く來往し。水

路を通し。橋梁を架し。隄防を築き。以て材木の貯蓄場とし。今の町名を加ふ。

●深川茂森町

◎位置及區域

深川茂森町は。仙臺堀の南岸にして。木場の東北角に在り。東は豊住町に對し。西は鶴歩町に臨み。南は木場町に界し。北は久永町に向へり。四方環らすに水を以てし。中に入堀あり。土地の番號は。僅かに三に過ぎず。

◎町名の起原並沿革

深川茂森町は。元祿十一年の埋築にして。同十四年十一月奈良屋兵助といへる者拂下を得て。商肆を開き同十六年四月今の町名を加ふ。但其の由來明かならざれども。水畔に老松あるを以てかく命せしならむ。正徳三年閏五月町方の支配に屬せり。

○數井氏と老松

今の横須賀造船所の艦材置場は。もと材木商數井氏の宅地なり。數井氏本家を和助といひ。分家を和三郎と稱す。二戸南北に並住す。其の商號を萬屋といふを以て人呼て萬和と爲す宅地に老松あり。鬱蒼愛すべし。茂森の名は或は此より起りしならむ。松陰に茂森稻荷社ありたり。

尾崎鉦次郎氏記者に語りて曰く。有名なる茂森町の老松は。明治十七八年の頃。暴風雨の爲めに水中に倒る。當時の管理

者加納治郎作氏(今の治五郎氏の父)名木の空しく水中に委するを惜み。巨金を投じて之を扶起したりと。

因て實地を検せしに。艦材置場の南岸に巨松あり。之を土人に問ふ。曰く是れ萬和の松なりと。記者尙ほ其の存在を喜びたりしに。翌日數井氏の縁家なる新田純孝氏記者の爲めに。數井氏の事と彼の老松の事を記して寄稿せられたり。

深川木場茂森町は二區に分れ。南方の一區は材木商數井和助。北方の一區は同商分家數井和三郎の家屋肆店あり。四圍皆材木堀にして各一廓を成し。家屋は宏大のものなりし。和三郎の家の北端即ち茂森橋の傍に稻荷の神祠あり。茂森稻荷と云ふ。檜造銅瓦の宏壯なるものなりし。境内に老松あり。蟠屈幾百年を経しものなりしが。今は枯てなし。

數井家の屋號を萬屋と稱せし故。世人單に萬和と稱呼す。木場材木商中巨擘のものなり。舊時は豪奢を極め。彼の八幡社の境内に住居せし畫工松本交山(世人山の交山と呼ぶ)などは。常に和助方に入出入し。隱居逸蕘翁に愛せられたるを以て世人萬和の交山と云ひたる程なりと。然るに維新の際商業の不振に加へて。諸大名への貸金は返済なく。又手宛の扶持は廢せられ。剩さへ舊幕府脱走兵士の用金需迫に困められ。一時閉店し。遂に零落して此地も皆人手に落ち今け海軍省の艦材置場と變じ。舊時の悌を存せず。

此茂森町邊は。萬和の祖先が選定したる所にして。古來此材木堀に浸しある木材には。鐵砲蟲が喰はぬと云傳ふ。此記に據れば。老松は今存せず且つ其の位置は北方なり。然るに今現に存するものは南岸なり。因て疑を抱き新田氏の令

弟清水純寧君の手を経て。目下冬木町五番地に居住せる數井氏(和三郎)に問合せしに。左の返書を得たり。

崎川橋キハに舊來御座候松大木は。二十二年前大嵐御座候節川中に倒れ。其砌根より切取申候。右松の木は別段に名稱は無之存居候。松陰に茂森稻荷社あり。凡三十二年前に取崩し。其後神社無之。其御神體は小生親類方の庭に御祭り有之候。

是に於て乎知る。彼の老松は今全く存在せず。現に南岸に在るものは。嘗て加納翁の扶起せしものなることを。記者は初め一株なりと信せし故に疑を抱きしなり。

●崎川橋

崎川橋は。仙臺堀に架し。茂森町より久永町に連絡す。元祿十六年奈良屋兵助の架する所にして。享保九年三月の火災に灰燼し。一旦中絶せしが。文化九年再架し。文政七年四月修理を施せり。舊橋は長十五間幅八尺なりしが。現在のものは長十八間幅二間半ありて。明治二十七年十二月の換架に係る。

●深川扇町

◎位置及區域

深川扇町は。仙臺堀の南岸に在りて。一區廓を成し。東は茂森町に對し。西は鶴歩町に隣り。南は木場町に面し。北は仙臺堀に限れり。土地の番號は一より十四に至る。其の中十一を缺きたり。

◎町名の起原並沿革

深川扇町は。元禄十一年の埋築にして。同十四年九月宇野屋孫八郎、三川屋權兵衛、市川屋藤兵衛拂下を請ふて。市店を開設し。同十六年四月今の町名を附したり。其の由来詳かならず。正徳三年閏五月始て町方の支配に屬せり。所謂木場の一なり。

●深川鶴歩町

◎位置及區域

深川鶴歩町は。仙臺堀の南岸に在りて。東は扇町、木場町に對し。西は大和町に臨み。南は島田町に隣り。北は仙臺堀に限れり。四邊皆水にて。其の内に數個の入堀あり。橋に縁りて他町に通ず。土地の番號は三に過ぎず。

◎町名の起原並沿革

深川鶴歩町は。もと沮洳の地なりしを。幕府之を埋築し。拂下地とし。一旦商人の買受る所となりしが。都合に因りて公收し。松平美濃守、永井伊豆守、土井周防守の別邸とせり。然るに浸潤甚きを以て上地し。平野忠重、甚四郎之を管理す。享保八年五月忠重官に請ふて私費を投じ。溝渠を通し隄防を築き。始て水田を開く。稱して平野新田といふ。然れども地勢卑窪の爲め潮水浸透し。收穫を期する能はざるを以て。更に請ふて市地と爲し。乃ち忠重の隠居名を以て町名とす。寶曆九年松平伊賀守の抱町並屋敷となり。明和六年十二月更に松平大膳太夫即ち毛利家の下屋敷となりぬ。慶應年間毛利家の上地以來復た市地と爲りたり。今は木場の一なり。

●深川大和町

◎位置及區域

深川大和町は。仙臺堀の南岸に在りて。東は同第一右支川に枕み。西は屈曲して。龜久町、冬木町及び和倉町に連り。南は油堀に面して入堀あり。北は仙臺堀に限れり。土地の番號は一より三十一に至る。其の中十九、二十五を缺きたり。

◎町名の起原並沿革

深川大和町は。往昔海岸の寄洲なりしを埋築したる地なり。元禄十四年八月深川黒江町鳥居茂兵衛、本八町堀四丁目上村屋傳四郎、榎本屋大右衛門、東湊川一丁目堺屋伊兵衛、神戸屋彦七、村山三右衛門、大野屋與平次、靈巖島町福田屋善兵衛、同銀町二丁目伊勢屋又四郎上請して市店を開設し。同十六年四月今の町名を附したり。正徳三年閏五月町方支配に屬す。明治二年四月に至り。町内中央の六人屋敷(享保十三年公收し。幕府小間使六人に賜りしもの)を合し。五年三月又附近の土地を編入せり。

●大和橋

大和橋は大和町より鶴歩町に連絡せる木橋なり。府内備考鶴歩町大和橋の條に「享保八年卯十月、築地町名主甚四郎、御代官伊奈半左衛門權左、願、新規掛渡云々、攝州大阪南之方道頓堀川筋大和町え相渡候大和橋、當所之移申度橋名目附申候よし申傳に御座候」とあるに據れば。此橋名より大和町の名は出たるが如くなれども。同町の名は元禄に已にあれば。此橋こそ却て大和町より出たりといふ方至當なるべし。

●深川龜久町

◎位置及區域

深川龜久町は。仙臺堀の南岸に在る一小市街にして。東南は大和町に界し。西は冬木町に連り。北は道路を擁して仙臺堀に臨めり。土地の番號は僅かに五に過ぎず。當町には入堀なし。

◎町名の起原並沿革

深川龜久町は。往昔は沼地にて。元禄十二年埋築せしものに係る。同十四年八月に至り。西河岸町の櫻井屋次郎右衛門上請して市肆を開設し。同十六年四月祝して今の町名を命じ。正徳三年閏五月始て町方の支配に屬せり。明治五年三月南方の土地を併合す。

●龜久橋

龜久橋は。仙臺堀に架して。龜久町と東平野町を連絡す。創架年月詳かならず。もと公設のものなりしが。享保十一年九月十八日命ありて。龜久町、大和町、東西平野町、冬木町の連帶橋となり居りしが。今は市設となりぬ。舊橋は長十四間二尺、幅七尺に過ぎざりしが。現在のものは長十五間、幅二間半あり。明治二十二年十二月の換架に係る。

●深川冬木町

◎位置及地域

深川冬木町は。仙臺堀中央の南岸に在りて。東は龜久町に連り。西は萬年町に界し。南は屈曲して大和町と和倉町とに限る。北は總て仙臺堀に臨めり。陸地三分にして入堀七分を占

ひ。土地の區畫は。一より十三に至る。其の中二、三、四を缺きたる。

◎町名の起原並沿革

深川冬木町は。もと深川寺町裏海邊新田、永代新田の内にして。戸田土佐守の抱地なりしが。寶永十一年四月冬木屋彌兵次、上田屋重兵衛の二人之を買收し。申請を経て商店を設け。彌平次の家號を以て町名とせり。正徳三年閏五月始て町方支配に屬す。明治五年三月に至り。坪井春龍、磯田助一郎等の土地を併合せり。

●水産講習所養魚試験所

水産講習所の養魚試験所は。冬木町七八番地に在り。種々の魚類を放ちて其の蕃殖を計畫せり。四十一年の冬當所に於て養成せし「カマミゴヒ」の試験あり。庖丁は山谷重箱の主人大谷儀兵衛之を執れり。此魚はもと獨逸産にて。三十七年の夏水産會の松原新之助氏。同國より取り寄せたるものにて。當歳の子魚は一年にて七寸五分乃至八寸に伸び。重量八九十匁より百匁に至る。其の卵子は一腹にて二十五萬乃至五十萬に及ぶ。然るに庖丁の結果脂肪強過ぎて口に適せず。因て主人は種々に調理し。遂に鮎と同じく甘露煮と爲し。始て好成績を得たりといふ。此魚果して能く世人の需用に適するや否。

●冬木辨財天堂

冬木辨財天堂は。冬木町十二番地に在り。承應三年冬木五郎

左衛門直次、竹生島の辨財天を茅場町の宅地に勸請せしを起原とす。寶永二年に至り。其の孫冬木彌平次之を今の地に移せり。明治三年より始めて公衆の參詣を許す。堂は新築にて池畔の高處に在り。傍に

菴やすし眼さへ覺れば杜宇 詩中
名月や池をめぐりて夜もすがら 芭蕉

の古碑もあり。池畔には三森幹雄氏の明倫社、古池吟社并に富有喜といふ有名名の「そばや」あり。

●紀文寄附の手洗鉢

市内巡杖記に云。深川區冬木町の辨財天に到る路傍に稻荷の小祠あり。祠の左方にある石の手洗鉢は。富豪と奢侈とを以て一世に鳴りたる紀文大盡の寄附せしものなりと。其の大きさは高二尺七八寸幅三尺計りの御影石にて造り。表面の中央に「稻荷社」其の左側に「享保八月初午」と刻しあり。稻荷祠の小さなと共に此の手洗鉢が。何人の寄附に係るやを知る人少し。

●深川和倉町

◎位置及區域

深川和倉町は。油堀の北岸に在りて。東は大和町に連り。西南は總て油堀に界し。北は入堀を隔て、冬木町と萬年町に對す。町内に入堀六ヶ所あり。土地の番號は一より三十八に至る。

◎町名の起原并沿革

深川和倉町は。維新前數町に分れ。富岡町(最東)蛤町(東北)西平野町添地(東南)佐賀町代地(西)南本所石原代地(正南)北本所代地(西南)と稱したる地なり。明治二年合併して一町とす。昔時北本所代地の東方に。幕府の櫛藏あり。里俗此地を略稱して「ワクラ」といへり。因て取て町名とせり。同五年南部遠江守下屋敷(東南)幕府附方組屋敷等を併合す。里俗に北方冬木町境を寺裏。西北伊勢崎町境を水場。當町東を江川場。南を三文字屋敷と唱ふ。

●深川萬年町二丁目

◎位置及區域

深川萬年町は。仙臺堀の南岸に在りて。分ちて一丁目、二丁目と爲す。其の一丁目は堀に沿ふて其の西に位置し。二丁目は其の東に在りて電車線路は其の西邊を劃斷せり。當町は東方總て冬木町に連り。西方は横堀に限り。南は屈曲して龜住町に界し。北は長く仙臺堀に枕めり。一丁目の小廓なるに比して。二丁目は寺地を包有するを以て大なり。土地の番號は左の如し。

一丁目 一番地より十四番地に至る
二丁目 一番地より二十九番地に至る。其中五、七番缺く

◎町名の起原并沿革

深川萬年町は。もと木置場の跡なり。元祿十三年十二月商賈等代官伊奈半左衛門に上請して之を拂下げ。市塵を開設し。祝して以て今の町名を附したり。正徳三年閏五月町方の支配

に屬す。明治二年四月に至り。海福寺門前(寶曆十一年開設)を二丁目に併せ。同五年十月更に海福寺、増林寺、寒光寺、正覺寺の地を同町に合せり。當町はもと三丁目までありしが。明治二年十二月三丁目を龜住町に編入せり。里俗に二丁目を寺町と唱ふ。寺院相連るを以てなり。

●直助屋敷

當町十丁目の中央に里俗直助屋敷と稱する處あり。相傳ふ。享保六年庄兵衛といへる商人の所有家屋に。町醫師中島隆碩と唱ふる者居住せり。一日隆碩并に其の家人直助と稱する者の爲めに斬殺せられ。且つ金貨を盜奪せられぬ。因て之を町奉行中山出雲守、大岡越前守に訴ふ。野上幸左衛門、篠原佐右衛門來り檢す。後ち加害者捕縛せられ。處刑ありて後ち。人呼で直助屋敷といふ。蓋し隆碩は赤穂藩主淺野長矩の臣小山田庄左衛門なり。嘗て元祿の事變起りし際。同じく金貨の分配を受け。同盟せし者なるが。大石良雄等吉良邸を襲ふの前夜逃亡し。良雄等切腹の後。剃髮して其の形を變じ。醫師と爲り居りし者なり。而して今此の如し。彼の盜奪せられし金貨は嘗て分配を受けしものといふ。想ふに當時江戸の諸人小山田の所爲を憎み、却て直助の斬殺を快とせしより。直助屋敷とは呼ばれるならむ。

●海邊橋

海邊橋は。市設の木橋にして。仙臺堀に架し。深川萬年町よ

り伊勢崎町に連絡す。元祿末年の創設に係る。一名正覺寺橋といふ同寺の傍に在るを以てなり。

本橋昔時は。長十八間、幅一丈四尺六寸なりしが。現在のものは長十六間幅四間に。明治二十八年十二月の換架なりとす。文政戊子の録上書に「海邊大工町より子之方橋名を萬年橋と唱ふ。當所を本文の通り相唱候義は。古へ名目取違候とも申傳。又は海邊新田境故唱初候由にも申傳候」とあり。考ふべし。

●深川龜住町

◎位置及區域

深川龜住町は。仙臺堀の南位に在り。東は斗出して和倉町に接し。西は材木町と大佳町とに對し。南は油堀に枕み。北は萬年町一二丁目に連れり。土地の番號は一より五十四に至る

◎町名の起原并沿革

深川龜住町はもと富久町(當町)平野町(東)三角屋敷(西)萬年町(三丁目)部の地なり。明治二年十二月合して一町と爲し。祝して以て今の名に改め。五年十月松平和泉守の邸地及び寺院地を編入す。里俗に萬年町界を本町と稱し。三角屋敷を三角と唱ふ。

●法乘院

法乘院は。龜住町三十五番地に在り。賢臺山と號す。豊山派眞言宗にして。大本山長谷寺の末なり。寬永六年覺春和尚の開基にして。賢宥和尚之を中興す。府内八十八ヶ所第四十四番の札所なり。

當寺に良辨の作と稱する不動尊の像あり。

曳尾庵記寛政元年の條に云。深川萬年町に「いさり」の無宿あり。同所法乘院の不動を念じ。三七日斷食にて祈りけるが。頓て腰立つ。皆々寄合剃髪いたさせて。不動堂守りとす。夫より此不動繁昌して堂の普請も成就す。其後此坊主不行跡にて追出されけり。しかしながら腰の立たるだけとくつきたり。

境内閻魔堂あり。運慶の作の閻魔像を安置す。俗に深川の閻魔と稱し。容容甚だ多し。

●玄信寺

玄信寺は。同町三十九番地に在り。幽遠山と號し。理照院と稱す。淨土宗にして京都知恩院の末なり。

開山は還蓮社木譽上人玄故大和尚にて。寛永六年佐賀町に創建し。其の後此地に移る。

本尊阿彌陀の像は。惠心僧都の作、崇源院（二代將軍徳川秀忠公夫人）の念持佛なりといふ。

當寺には弘法大師作辨財天の坐像、祐天僧正開眼の正觀世音等あり。

●心行寺

心行寺は。龜住町四十三番地に在り。雙修山と號し。養源院と稱す。淨土宗にして芝増上寺の末なり。

開山は園譽上人屋道和尚にて。元和二年八町堀に創立し。後ち此地に移る。

●寒光寺

寒光寺は。同町二十番地に在り。臨濟宗にして鎌倉圓覺寺派なり。寛永十年の創立にて。開山は碩分和尚とす。

當寺は四回改稱せり。寺傳に云。初め赤阪に創建して不識山雲巖寺と號し。寶永七年深川蘆村（現地）に移りて蘆村寺と稱し。既にして三聖山惠然寺と改む。安政中僧月洲堂宇を再建し。明治二年今の名に改む。釋迦如來を本尊とし。聖徳太子作と稱する正觀世音像及び惠心僧都作と稱する阿彌陀如來像を安置す。舊支院に法身院、祥雲寺、妙中寺等あり。

●増林寺

増林寺は同町十二番地に在り。海照山と號す。曹洞宗にして駒込淺嘉町高林寺の末なり。

寛永五年の創立にて。開基は金龍和尚、中興は慈門和尚とす。門に江左禪林の額を掲ぐ。署名なし。其の文字最も雅なり。江戸砂子補に云。當寺門内の練堀色色の大石を塗こめて稀有のものなり。寶曆のはじめ當寺住職のみづから作る所とぞ。記者之を實視せしに。今尙ほ現在す。一見長崎の唐寺に遊べる思あり。

白衣觀音堂 當寺境内十一番地に在り。江戸三十三所第三十一番なり。

●海福寺

海福寺は。同十六番地に在り。永壽山と號す。黃檗宗にして

本尊惠心僧都の作阿彌陀如來にして。俗に菘包の彌陀と唱ふ又矢除千手觀世音あり。多田滿仲の護持佛なり。

什寶には。狩野春湖筆涅槃像一幅、無量壽經曼陀羅圖畫二幅、法橋玉山筆龍虎の圖二幅及び文福茶釜（泣茶釜と稱す）あり。

●陽岳寺

陽岳寺は。同町三十番地に在り。長尖山と號す。臨濟宗にして京都妙心寺の末なり。

寛永十四年の創立にて。開基は文室和尚中興は大室和尚とす。惠心僧都の作觀世音を安置す。其の胎内佛は武田信玄の向井將監に與へたる木佛なりといふ。其の他坪内大隅守作出山釋迦像、文珠九助の自書及畫像木像を藏す。門前に山城伏見義民文珠九助靈所の石標竝に伏見義民之神（内大臣三條實美題額）を建つ。明治三十年五月設くる所なり。

當寺には向井將監忠勝及び畫家英一蜂、嵩月の墓あり。

●正覺寺

正覺寺は。萬年町二丁目八番地に在り。大音山と號し。響流院と稱す。淨土宗にして區内富岡町正源寺の末なり。

寛永六年白玄和尚の開基に係る。觀世音堂あり。閻浮檀金の千手觀世音を安置す。相傳て源賴朝卿の持佛といふ。江戸三十三所第二十番なり。

又深川三十三間堂毀撤の際。其の本尊たる頭痛除千手觀世音をもこゝに安置せり。

其の傍仙臺堀に架したる橋をもと正覺寺と唱へたり。

山城國萬福寺の末なり。寛永五年僧道安の開設に係る。初め眞言宗なりしが。承應三年明僧隱元和和尚歸化の際請ふて開山とす。故に砂子には萬治元年戌十一月起立とあり。

當寺はもと同宗の觸頭たり。後水尾天皇宸筆一軸、同宸翰二卷を藏す。

●舊名主甚四郎の由緒

興名主甚四郎の祖先是。河内國平野村の住人平野主水正業賢にして。其の子甚右衛門長治は。織田信長に仕へ。天正十年六月二日京都本能寺戰役の際に。信忠に屬し。二條に於て戰死す。男甚右衛門了長は秀吉に仕へて屢々戰功あり。元和元年五月六日大阪の役に秀頼に屬し。遂に戰死せり。其の妻時に孕めるあり。平野村に在りしが。江戸に來り。地を淺草旅籠町一丁目に求めて居住し。男子を生む。因て陣九郎重政と名く。長して甚右衛門と改む。町人となりて飴を製す。世に之を平野飴といふ。寛文十二年四月十四日病死す。其の子佐兵衛重秀は釀酒を業とし。延寶五年二月十九日歿す。男甚右衛門重久貞享の頃本所林町二丁目に移轉し。釀酒を業とし。元祿三年十二月二十七日疾を以て終る。時に子萬太郎幼稚なるを以て弟甚四郎長久繼業せり。元祿十一年春代官伊奈半左衛門、及び深津八郎衛門に屬し。深川の填築工事に從事し。同十二年三月二十三日元木場の内竣成したるを以て。名主役を命ぜられ。二十二ヶ町を支配し。其の居住せる町名を平野町と名く。正徳元年六月二十三日兄の一子萬太郎を養子とし

甚四郎忠重と改む。名主役を相續せしめ。退隠して陣右衛門と稱す。享保九年十一月四日歿す。其の後甚四郎諸侯三家の下屋敷泉濕の爲め土地となりしを。更に耕作地と爲さむことを申請し。許可を得て平野新田と名く。然るに豊作を得ざるを以て。再願して町並屋敷と爲し。鶴歩町と命ず。後十九年退隠し。鶴歩と稱し。元文三年八月二十三日病歿す。文政戊子に至り。名主役相續六代に至れり。

●探茶庵の址

江戸名所圖會に云。深川平野町に俳諧師杉風の探茶庵あり。杉風は杉山氏。鯉屋と唱へ。江戸小田原町の魚商なり。後ち隱栖して一元と號す。常に俳諧を好み。檀林風を慕ひ。又芭蕉翁を師とす。斯道に遊ぶこと凡そ六十年。翁常に興せられて曰く。去來は西三十三ヶ國、杉風は東三十三ヶ國の俳諧奉行なりと。杉風句集に云。

白露もこほれぬ萩のうねりかな
芭蕉
深川は月も時雨るゝ夜風かな
杉風

俳人百家選に。「晝寝して手のうごきやむ團扇かな」の句を掲げ。鯉頭に記して云。杉風は江戸小田原町鯉屋藤左衛門といふ魚問屋にて。兄仙風と共に蕉翁の門に入り。兄早く世を去りしかば。杉風家を繼ぐ。頗る富ると雖も上氣の症にて耳少しく遠し。桃青江戸に來りてまた遠行の思ひある時。杉風とあてて。世の俳を見破りて。山林に工夫せんとし給ふこと尤なれども。塵をとほざけ閑をへるは。市中にも山林なからんや。山中にも俗塵なしといふべからず。翁答へて吾もとより

清住町の渡は。一に中洲の渡といふ。深川清住町河岸の南寄より中洲の東畔を経て。前岸なる日本橋區葛浦河岸に達する渡津なり。賃錢一人八厘、人力車一錢五厘、自轉車一錢とす。

●專賣局事務所

專賣局清住町事務所は。當町大川河岸通りに在り。煙草貯藏の倉庫ありて。盛りに他に運出するを見る。

●靈雲院

靈運院は。清住町二十二番地に在り。天王山と號し。福源寺と稱し。曹洞宗にして武藏國入間郡龍ヶ谷村龍穩寺の末なり。寶曆八年放光東明和尚の開設に係る。もと寺領二百石ありたり。本尊持經觀世音は。唐の三藏玄奘の彫刻なりといふ。

●淺野セメント合資會社

淺野セメント合資會社は清住町一番地に在り。セメントの製造及び販賣を目的とす。本社は我國に於けるセメント製造最先の工場にして。明治四年工部省工作局大技長宇都宮三郎の創設に係る。其の後事業の擴張と共に多大の經費を要し。十五年廢業するの已むを得ざるに至りぬ。十六年淺野總一郎氏請ふて之を借受け。十七年拂下を受けて淺野セメント工場と改稱す。爾來業務の整理と製造法の改良とに刻苦し。漸次其の面目を革め。二十五年第二工場を福岡縣門司に設立して大に製産額を増加し。廣く内外の需用に應ず。三十年更に事業の擴張を圖り。資本金を

仙を學ぶの徒にあらず。されど市中に幽靜は得かたからん。杉風曰。目馳走を見ず。耳に車馬の喧を聞ずば可ならんと。伴ひて杉風の別荘深川に至り。爰に住しめ。是より芭蕉の名も起る。杉風娘ひとり持て深く愛し。

紅梅は娘すまする妻戸かな
いさよひや我身にしれと月の缺
八十餘にして。享保十七年六月十三日歿す。

●深川清住寺

◎位置及區域

深川清住町は。大川の東岸に在りて仙臺堀入口の北に位す。東の中央は凸出し。總て伊勢崎町に連り。西は河岸を擁して大川に面し。南は仙臺堀に限り。北は西大工町に接せり。土地の番號は一より二十九に至る。其の中二十七を缺きたり。

◎町名の起原沿革

深川清住町はもと海岸潮除隄干潟の地なりしを寛永六年彌兵衛等八人官に請ふて埋築し居住地とす。所謂獵師町八區の一なり。當時彌兵衛町と稱せしが。元祿八年今の町名に改む。清住は蓋し彌兵衛の本姓ならむ。同十五年九月町並地となり。正徳三年五月町方支配に屬せり。明治四年海邊大工町代地を併せ。同五年三月松平陸奥守、横田筑後守の下屋敷、向阪左近、森本彌一郎、淺井瀨兵衛の邸地及び靈雲院の地を併加せり。

●清住町の渡

増して八十萬圓と爲し。合資會社とし。今の名に改む。現に四臺三百八十五馬力の機關を有し。百五十人の職工を使用し。一ヶ年五十萬樽を製出す。本社の製品は海水の浸害を受けざるを以て船渠用築港用等に使用するものは。近年外國品の輸入を仰がず。悉く本社の供給を受くるに至れりといふ。

●深川伊勢崎町

◎位置及地域

深川伊勢崎町は。仙臺堀の北岸に在りて。東は電車線路を隔て。斜めに西平野町と靈岸町に對し。西は清住町の一角に臨み。南は河岸地を擁して。仙臺堀に限り。北は仲大工町と清住町に連りたり。其の地形東方は大にして。西方は狭小なり。土地の番號は。一より二十六に至る。

◎町名の起原沿革

深川伊勢崎町は。昔時代官伊奈半左衛門の支配地にして。寛永より元祿の頃まで。南茅場町邊並に松村町の材木問屋の貯木場たり。元祿十一年十一月朔日。川舟方手代十三人同心六人の受領地となり。新に市店を開設し。正徳三年閏五月町方の支配に屬せり。明治四年に至り。町北の南本所石原代地町を合し。五年三月又附近の土地を編入したり。

●岩崎氏別邸

岩崎氏別邸は。當町より清住町に亘りて一大庭園を占る有名なる邸宅なり。同邸は昔時紀文大盡が小園を築きしといひ傳へられたる所にして。明治十一年頃故岩崎彌太郎氏が非常な

る手入を爲し。大規模の庭園とせしものとして。間雅なる仙趣いふばかりなし。四十一年十月十九日同家に於て米賓招待會をこゝに開きし際。米賓は一見して先づ驚き「只今迄御馳走は澤山戴きたれど。日本固有の趣味深き山水の名園を観るは今日が始めてなり」と。賞賛措きしをいへり。

●深川西平野町

◎位置及區域

深川西平野町は。仙臺堀の北岸に在り。東は東平野町に沿ふて。其の一角延長し。西は電車線路を隔て、伊勢崎町に面し。南は仙臺堀に限り。北は靈岸町に連る。東西に亘れる入堀あり。土地の番號は一より二十一に至る。

◎町名の起原並沿革

深川西平野町は。其の起立東平野町に同じ。正徳三年閏五月町方の支配に屬し。明治四年十一月に至り。舊牧野備前守、秋田筑後守、上田主殿助の下屋敷を併合せり。里俗に當町を水場と唱ふ。

●深川警察署

深川警察署は。西平野町二番地に在り。明治五年第六大區一、二、三小區遷卒屯所を置き。之を合して萬年町二丁目寒光寺に開設せしを起原とす。八年警視第六分廳第一署と稱し。富岡門前仲町に移り。尋て警視第六方面第一署と改め。十年に同第一分署、十四年に第四方面深川區富岡門前警察署、十八年に第六方面富岡門前警察署と稱し。二十六年今の名に改め

後ち名主平野長久の氏名を取りて今の稱に改め。東西二町に分てり。

●吉岡橋

吉岡橋は。仙臺堀北入堀に架し。東平野町より吉永町に連絡す。元祿十六年三月の官設なり。

御入用橋簡所書に。天保三辰年掛替、幅七尺之處九尺と成る。新規橋臺石垣築立、弘化四未年冬掛替とあり。

現在のものは。長八間幅二間半にして。明治二十一年十月の換架に係る。

◎東西平野町の景況

東平野町は仙臺堀に枕み、漕運の利便よろしきを以て悉く材木商店なり。即ち井定支店、武市、木村、福田、井田、岸合資會社、平野、岡田、小笠原、中本、乙訓、の諸店軒を連ぬ。西平野町も亦河岸通りは材木商にて、小池、江口、江島、中川、森吉、鈴木、深見、上龜の諸店あり。西部は電車線路に面し。普通商店相接し。清物店小田原屋、元祖おこし龜屋等あり。

●深川山本町

◎位置及區域

深川山本町は。仙臺堀北入堀の西岸に在る小市街なり。東は西永町と吉永町の一部に對し。西北は總て靈岸町に連り。南は東平野町の一部に接せり。入堀二ヶ所あり。土地の番號は五に過ぎず。

深川一圓を統管し。二十九年西平野町に移り。三十九年假りに淨心寺に轉じ。新築成りて復歸せるなり。當區には此外深川八名川町警察署ありしが。十八年に之を廢し。其の所管を本所相生町警察署、及び小松川警察署に屬せり。

●深川女學校

深川女學校は。同町一番地に在り。明治三十六年六月の創立にして。女子に須要なる高等普通學を教授す。修業年限は四年にて。入學金一圓月謝二圓五十錢なり。校長を戸野みらゑ子とす。

●深川東平野町

◎位置及區域

深川東平野町は。仙臺堀の北畔中央に在り。東は入堀を隔て、吉永町に對し。西は西平野町に臨み。南は仙臺堀に限り。北の一部は山本町に連り。其の他は堀を隔て、靈岸町に向へり。地形は東西に延びたり。土地の區劃は一より四十一に至る。

◎町名の起原並沿革

深川東平野町は。往昔海岸の寄洲なりしを。元祿十一年代官伊奈半左衛門、普請奉行深津八郎右衛門董督して之を埋築し同十四年八月。本所相生町二丁目駿河屋喜兵衛、深川黒江町鳥居屋茂兵衛、野村屋善右衛門、伊勢屋四郎右衛門の四人。官に請ふて市肆を開設し。同十六年四月長岡町と唱へしが。

◎町名の起原並沿革

深川山本町は。其の開拓、東西平野町に同じ。元祿十四年九月西河岸町櫻井屋治郎右衛門請ふて市肆を設置し、同十六年四月今の町名を加ふ。山本は或は櫻井屋の本姓ならむ。正徳三年閏五月町方の支配に屬せり。當町も亦木場の一たり。

●深川靈岸町

◎位置及區域

深川靈岸町は。小名木川の南位に在り。不規則なる形状を成して擴大せる土地なり。東は山本町より元加賀町に連り。西は電車線路を隔て、伊勢崎町と仲大工町に面し。南は東西平野町に界し。北は東大工町に隣れり。土地の番號は一より百六十八に至る。

◎町名の起原並沿革

深川靈岸町は。もと靈巖寺表門前町、裏門前町といへり。此門前町は。寛永元年靈巖寺を靈巖島に創立したる頃より在りし商家にて。萬治二年同寺の此地に移るに際し。商家も亦隨て移れり。延享二年町方の支配に屬す。初めは門前町とのみ稱せしが寛政三年より。表裏に分稱せり。明治四年十一月に至り。今の町名に改め。五年附近の土地并に靈巖寺、淨心寺、雲光院、法禪寺を併合せり。

◎概況

當町は靈巖寺、淨心寺、雲光院の三大刹ありて。土地の九分を占有し。市街地は其の一部に過ぎず。東方は木場に接する

を以て喧雑ならざるも。西方は電車線路に接し。且つ寺院の入口なるに因り繁華なり。

●深川區役所

深川區役所は靈岸町四十八番地即ち靈巖寺の東隣に在り。本所は明治十一年十一月伊勢崎町二十二番地に開設し。十五年九月靈岸町十八番地に移り二十五年十月に至り。此地に新築せり。建物は煉瓦造りなり。歴任區長は左の如し。

- 大木 良房 十一年十一月任 森 長義 十四年六月任
- 堀田 正養 十四年八月任 林 厚徳 十二年三月兼任
- 石井 彌六 十二年六月任 風祭甚三郎 十四年三月任
- 仁杉 英 三十四年三月任 溝口鑄次郎 三十六年八月任

●靈岸尋常小學校

靈岸尋常小學校は。同町に在り。市立の特殊學校にして。貧困者の兒童を就學せしむる所とす。生徒凡そ四百餘人あり。其の設備は總て他の特殊學校に同じ。

●淨心寺

淨心寺は。靈岸町十八番地に在り。法華山と號す。日蓮宗にして甲斐國久遠寺の末なり。開山を日義聖人。中興を日念聖人とす。幕府の老女三澤局の開基にて。淨心は其の法號に係る。江戸砂子等其の創立の年次を掲げず。東京案内には明曆三年とあり。然れども墓域を巡檢せしに。靈瑞院殿蓮宗合靈、

墓面には晴雲院殿從五位下秋月日高定謙大居士、天保十三壬寅年七月二十四日とあり。

○間宮林藏墓

墓面に間宮林藏蕪崇之墓とありて。側面に天保十五年二月二十六日歿と刻し。贈位後左の如く歿年の左右に追錫せり。明治三十七年四月二十三日 勅贈正五位賞當時探檢北邊之功、間宮孝義追誌以表特恩 海軍中將正二位勳一等子爵榎本武揚書

●本立院清正公堂

淨心寺中本立院は。十二番地に在り。寶永年間清水氏の開基に係る。其の證は新田純孝氏の系譜中に見ゆ。同氏五代以前の祖清水半兵衛顯恒の條に 寶永年中深川淨心寺中に本立院を建立して祖父玄明院様の御菩提を吊ふとあり。玄明院といふは、清水半兵衛純嗣といひ。新田岩松藩次郎源秀純の支子にて。當時本性を憚り。母方の清水氏を稱したる人なり。天和年中に死し淨心寺中に葬る。同院に清正公の堂あり。祀る所の靈像は東帶の坐像にて。長け二尺二寸あり。もと熊本城の天主閣に鎮坐しありしを。鎮臺に屬せし際民間に出しものなりといへり。當所に祀れる由來は左記の文書に徴して之を知るべし

證

別紙讓狀之通淨池院靈像并所持之品物等今般白川縣下古閑學平と申入より拙者讓受申候處俗家手狹に付御守等行届兼

慶長十七壬子年七月二十六日。蓮成院殿日宗合靈元和九癸亥年七月十一日阿部左衛門頭。玄了院殿秀月合靈寛永十七甲辰年五月二日と刻したる古墓あれば。其の以前なること明かなり。

舊寺領は百石ありたり。新編江戸志に寛文二年壬寅四月三日寺領の御朱印を下し給る。小堀下總守母菩提所によつてなり御日記に見ゆるとあり。

表門を入れれば。左右に支院たる玉泉院(十番地)本立院(十二番地)別項に記す。善應院(十四番地)以上間隆院(三十二番地)唱行院(三十一番地)一乘院(二十九番地)北側あり。

又奥の東方に圓珠院(二十三番地)宣明院(二十六番地)あり本堂は瓦葺にて宏壯なり。創立の當時有名なる吉田御殿を幕府より賜りて建築せしが。其の後屢焼失せしも復興の際其の舊型を失はずして以て今に至る。故に他の本堂作りとは異れりといふ。

堂北に祖師堂(前面の扁額に祖師堂とありて八十歳長雄と署す。堂内除剣の大額は。新田俊純の筆なり)朝師堂。鬼子母神堂、七面堂、妙見堂、帝釋堂あり。

又朝師堂の傍に説法二萬座自動中興開基日念聖人寶永四丁亥年七月七日と刻したる石標等を列建せり。

東方には上行菩薩の石像を安置せる小堂あり。○矢部下總守定令墓

墓面には勇健院殿從五位下直道日成大居士、文化十癸酉年八月十三日とありて。側面に古賀精里の選文を刻す。○矢部駿河守定謙墓

可申と存候間則其御寺へ奉納仕候間永代御誦經御守被下候様御依託申上候依て奉納書差入置申候也

明治八亥年十二月十九日

第一大六區小區錦町二番地 鈴木伊兵衛印

第六大區三小區 深川靈岸町三十番地

淨心寺塔中 本立院住職

江上勝義

右申上候今般拙院檀家第一大區六小區錦町二番地鈴木伊兵衛なる者左之品々寄附致度旨申出候に付品物之儀に付出所等篤と相糺候處白川縣熊本迎町古閑學平と申者元縣廳より御拂下け並自分所有之品物共取交所持罷在候處右様邊土の地に差置候も不本意被存前書鈴木伊兵衛とは兼て懇意の者に付同人方より持參相託候趣然るに同人儀も素より俗民の儀故所有可致心體無之依て拙院儀は檀家之縁合を以て寄附致度旨申聞候夫々承糺し候處別不都合も無之様相聞候間任三其意寄附可爲致奉存候依之品書相添此段奉願上候也

明治八年十二月二十五日

淨心寺塔中 本立院住職 江上勝義印 淨心寺住職 金森日圭印

第一大區六小區錦町二番地
寄附人 鈴木伊兵衛 印
第一大區十四小區
小傳馬町一丁目二番地
檀中總代 西村吉兵衛 印
前書之通申出候間依て與印仕候也
第六大區三小區戸長 佐藤 貞嘉 印

縣廳より御拂下げ相成候旨申立候分

- 淨池院靈像
- 一題目旗 一對 一立烏帽子兜
 - 一眞筆 一軸 一徳川家康書簡
 - 一片鎌槍 一長刀
 - 一馬印 一長具足
 - 一陣太鼓 一忠廣公具足
 - 一木村又藏具足 一朝鮮分捕馬具
 - 一同分捕兜 二頭 一同短筒
 - 一兵士具足

右關學平所有品の由申立候分

- 一馬面 一朝鮮龜形瓦
- 一陣太刀 一陣羽織
- 一鞭 一鎧 半足
- 一腹卷 一七點

朱書

書面願之趣聞置候事 官印

明治八年十二月二十七日 東京府權知事楠本正隆
本年一月二十三日清水純寧氏と同じく同院樓上に於て右の寶物を實見せり。此外清正公の小像竝に手簡、熊本本妙寺の縁起(享保年間書したるもの)等數點あり。殊に分捕の諸品蔚山城の瓦など最も珍とすべし。本年は公の歿後三百年に當れば。六月廿日より衆庶の展覽に供すといふ。

●芽出多松

芽出多松は。本立院の庭前に在り。樹下に一碑を建て其の由来を記す。左の如し。
茲に明治十六年五月兩國回向院の境内に於て出來山長吉なる者大相撲の勳進元をつとめ日本橋魚河岸より盤臺二百駄を積む其頂に松の根の斷ちたるを植飾れり興行終るの後此松を鈴木伊兵衛に寄たりけるを當山の庭中に試み植けるが日ならずして新に芽を出し枝葉繁る人皆不思議の思を爲しぬ因て名けて芽出多松といふかく千代の榮を祈りて聊か事の由をこゝにしるし置くこととせり
于時明治十八年五月 壽々喜老人建之

●法禪寺

法禪寺は。靈岸町百五十七番地に在り。日照山と號し。專承院と稱す。淨土宗にして京都知恩院の末なり。至徳元年の創立にて。開山は長蓮社心阿上人。開基は宇田川和泉守とす。初め品川宿に在りしが。文祿二年江戸道三河岸

に移り。慶長七年雲頂和尚之を中興し。天和九年馬喰町に轉じ。明曆三年の大火後此地に移りぬ。

舊支院にして存する者には。良信院(百六十一番地)常照院(百五十六番地)南龍院(百五十五番地)あり。江戸砂子に云。當寺もと八代洲河岸にあり。今に正月三ヶ日鉦鼓を鳴さず。これはむかし御城近ゆへ初春三日遠慮せし例とぞ。其後馬喰町上寺町にあり。天和年中當所にうつる。

- 塔頭 常照院 宗心院 南龍院 良信院 專修院
- 蓮乘院 玉樹院 貞照院

●靈巖寺

靈巖寺は。靈岸町四十六番地に在り。道本山と號し。東海院と稱す。淨土宗十八檀林の一にして。京都知恩院の末なり。寛永元年檀蓮社雄譽上人松風靈巖和尚の開設に係る。上人初め靈巖島を築き。當寺を創置す。其の地は今の京橋區靈巖島町の邊是なり。明曆の大火後。萬治二年十二月此地に移轉せり。表門は素木、丸柱、銅葺にて。十六羅漢其の他の彫刻を施し。道本山の金字額を掲ぐ。結構最も觀るべし。舊圖に據れば表門は今の電車線路に對してあり。か、れば今の表門はもとの中門なり。

門内敷石あり。本堂に達す。東に鐘樓あり。西に一切藏經あり。本堂は正面に聳え。素木造り瓦葺きにて。棟上には丸に梵字の金章を表出し。容殿、庫裡は其の南東に連る。堂前各所に芝地あり。松、櫻、銀杏等點在し。織塵を留めず。清掃愛すべし。西畔に銅製露坐丈六の地藏尊を安置す。其の臺石

に建立願主地藏坊正元上人とあり。江戸六地藏の一なり。もとは中門の東に在りたり。小蓮池其の稍々北方に在りて埒を繞らし石疋を架し。「不忠不孝渡邊登」の巨碑を樹つ。

門内東畔には。小堂ありて。其の前頭に圓光東漸大師眞影安置の石碑を建置せり。昔時は境内に鎮守社、稻荷社、金毘羅社、ありしが。神佛混淆禁止の際之を除去せり。

學寮はもと(總合舊境内の西方)に十三寮。中谷(同南方)に九寮。柳谷(同東方)に十一寮。錦谷(同最東方)に八寮ありたり。此中寺院となりて今現在する者數軒あり。支院は下に記す。

萬日念佛供養塔は。東方行路左側の墓域に在り。高一丈五尺許、幅三尺餘。世俗之を獄吏淺右衛門の建し萬人塚といふは非なり。銘に云。

武州豐高郡江戸道本山靈巖寺念佛堂一萬日念佛成就奉同向(供養塔、願以此功德平等施一切同發菩提心往生安樂國、右萬日開關之道師當山開基雄譽上人、回向道師當院第三世大譽上人、時承應二癸巳曆九月一日。中央に南無阿彌陀佛大譽(花押)願主念佛稱入大徳と彫り。其の他滿面に施主の法號を刻せり。

●松平樂翁公の墓

幕府寛政の賢宰として高名なる松平定信即ち樂翁公の墓は。當寺本堂の西畔墓域の内に在り。其の塋は石を疊みて築き。繞らすに石の玉垣を以てし。前に石門を立て石燈籠數基を配

置す。墓表面には
故白河城主樂翁公之墓
と題し。側面に左の如く刻せり

公諱定信、幼稱賢丸、晚號樂翁、田安中納言宗武卿第七子、安永三年以寛光院公無子、命公爲其嗣、任上總介、天明三年襲封白河、任越中守、叙四品、七年爲加判上座、任侍從、未幾特命輔佐、寛政五年辭免爲留詰、任少將、文化九年致仕、文政十二年五月十三日病逝、壽七十二、號曰守國院

文中一言も其の性行に及ばず。蓋し公の遺志に基けるものなるべし。謙徳欽仰するに餘りあり。」
北方稍々距りて夫人の墓あり。正面には至誠院殿心譽智光慈集大姉と題し。背面に左の文を刻す

弘化四年十二月一日、故白河城主源守國公配至誠大夫人、疾逝于江戶築地邸、葬深川靈巖寺之塋、初公之先配靜徳夫人之逝、太夫人以大迢公外曾孫來歸。生保國公、今公見爲曾孫、而每事折遜、終始如一、豫慮一朝不諱、題墓仍定制相並、則嫌於專嫡、乃私命鑄法號、且不得並兆域、今者一奉遺志、不敢有改、謹書顛末於碑陰、以見謙徳之美焉、

臣秋山藤鳴謹選 臣駒井重周謹書
斯人にして斯の賢配あり。双美といふべし。

●本多忠統の墓

本多忠統の墓も當寺に在り。忠統は荻生祖徠の高弟にして。

靈巖寺文政十一年戊子の錄上書に云。起立之儀は元和の頃。開山靈巖上人の弘法安房上總兩國其化益に預る者國中に滿行徳四方に聞え。殊に神君様台徳院様大猷院様御歸依被遊。御府内の貴賤道俗其徳を慕ふ者多く有けり。上人滯留之道場地なれば。或時上人堀庄兵衛といふ者に語りて。房總兩國より著船便宜之場所見立べしとの事。庄兵衛申様日本橋より十町計り下に廣き蘆原あり。向井將監殿持地而也。則是を所望せられければ。早速に成て寛永元年起立す。(此時之寄附東西壹町餘南北貳町許之海沼なり)同四年七月十九日開山靈巖和尚台徳院様依御上意御前法問修行仕候。其砌起立地面共都て六町餘拜領仕候。歸依之道俗折寄水地築立。本堂諸宇建立成就せり。其頃より世人誰いふとなく靈巖島とぞ名付けり。第二世山和尚の代にあたりて明曆三百年正月十八日十九日兩日御府内の大火に類焼す。因て萬治元戊年三月十八日深川江替地拜領す。是又海濱なり。珂山之弟子珂碩に命じて築しめ。堂宇再建す。今の寺なり。

○開山雄舉上人靈巖和尚は。駿河國沼津の生なり。父は今川家の一族沼津土佐守氏勝の三男母は庵原氏の女なり。知筆の頃出家して上總國生實大巖寺に入學し。下總安房に専ら諸人を化益し。普く諸國に遊歴し。道俗貴賤歸依すくならず。新寺建立拾有餘ヶ所なり。寛永の初當山を起立し住職中。同六年に京都總本山知恩院住職被仰付。同十月二十五日彼寺江入院す。折柄大猷院様御世兩御九台徳院様大御所様と申上候頃。靈巖和尚登城拜領物等仕。知恩院住職之上本堂方丈向諸宇御再建成就被成下爲御禮。關東下向。當山滯留之内聊病

所謂荷蘭藤侯是なり。伊豫守に任ず。寶曆七年丁丑二月二十九日卒す。年六十七法諡して長徳公といふ。

●諸大名の墓

當寺には諸大名の墓壘々として存せり。其中一二を擧ぐべし。

○故桑名城主惠徳公之墓

○豫州今治城主從五位下松平河内守其他歴代の墓

○清淨院殿前從四位下羽林次將越州刺史明譽光岸照詰大居士

元祿十二己卯天二月十一日逝

○故圖書頭從五位下藤原朝臣康桓公之墓

明和六己丑年六月十六日逝

墓側に左の詩歌を刻せり

病中吟

五十五生涯 遊山復醉花 曉風醒蝶夢 空外月西斜
みるほともあらてさめなんあかつきの

ほと、きすなく夢の世の中

○從四位下侍從右京大夫榊原氏源姓政永墓

徳全院殿永譽敬道仁山大居士

文化四丁卯年十二月二十九日

此墓には墓碑の背後に家屋の如き大石柳あり。他寺に於て未だ嘗て見ざるの結構なり。

○麗光院操譽松岳貞心大姉 文化三丙寅年十一月十二日

此墓は高石臺の上に在りて最も人目を惹けり

惱みて。寛永十八己年九月朔日端坐合掌高聲念佛して遷化す。

年齡八十八に御座候。

○本堂間口十三間 奥行十五間餘

右は寛政九己年十一月二十二日夜神田より出火之砌類焼に而。當時本堂無之礎のみ存せり。(其後再建兩次焼失今の堂は明治某年の新築)

本尊阿彌陀如來 木坐像長四尺雲慶作

脇立 觀音勢至 木坐像長二尺同人作

○御朱印高五拾石當山第三世大譽珂山和尚檀林所境内狹小之由奉願上候處。萬治二亥年六月十四日嚴有院様御代於武州豐島郡西葛西領大島村。寺領五拾石初而拜領仕。其後寛文五己年七月十一日嚴有院様御代寺中門前竹木諸役等御免除之御朱印頂戴仕候。御文言之寫左之通り

靈巖寺領武藏國豐島郡葛西大島村之内五拾石之事新寄附之。畢寺中門前竹木諸役免除永不可有相違者也仍而如件

寛文五己年七月十一日

○當寺檀林所に被爲仰付候儀者。寛永五戊辰年四月十八日台徳院様御世東照神君様御願望之十八檀林所御不足御座候に付則當寺檀林所被爲仰付。則當寺開山雄舉上人代に御座候

○別院

長專院境内百九 十三坪 (靈岸町六十七番地)

建立之來由は。寛永二十未年榊原式部大輔忠次殿室久昌院當山江御送葬有之候に付。御住居向被下置。則榊原侯而御建立被下候。夫より以來榊原家之内寺に御座候。

開基長蓮社命譽圓壽和尚寛文二寅年九月寂。出生は榊原
家中に御座候。

雄松院境内五百九十一坪 (同四十三番地)

元和辛酉年雄譽上人常念佛道場に建立有之候。當院由來
塔中西堂寺に而有之候處當山末寺少に付老僧成就に困
り入。香衣寺に被成下候。禰大衆一同方丈江相願候に付。
方丈より増上寺へ相願。寶曆十四甲申年六月別院香衣寺
に免許御座候。

中興顯蓮社隨譽良頌和尚明和五戊子年十二月廿一日卒。
濟生院境内百二十九坪 (同八十三番地)

元來學寮に御座候處。安永四年靈雲和尚依願別院に相
成申候。

開基貫蓮社端譽靈雲和尚天明八申年二月廿三日卒。
觀世音堂

○塔頭
正覺院 (同六十四番地)

開基天蓮社長譽久傳和尚寛文三卯年八月七日寂。
成等院 (同七十三番地)

開基莊蓮社嚴譽存説和尚延寶元元年十月四日寂。
榮壽院

開基清蓮社倫譽吞隨和尚慶安二丑年六月四日寂。
深照院

開基信蓮社單譽良閑和尚萬治元戌年十一月廿五日寂。
安養院

開基實蓮社貞譽順風和尚慶安三寅年九月廿六日寂。

開善院 (同五十番地)

開基顯蓮社向譽雄悅和尚享保十八丑年七月廿五日寂。

淨閑院 (同五十五番地)

開基念蓮社稱譽春也和尚延寶六年十月十七日寂。

松林院 (同七十五番地)

開基迎蓮社來譽春太和和尚承應元辰年九月十三日寂。

○八庵
廣閑院 (同百十二番地)

開基心譽單心大徳と號し。正徳六申年五月十七日寂。文
政十一年迄百四年に相成申候。度々類焼仕開基之來由相
分り不申候

本尊阿彌陀 浪除觀世音長五尺三寸 行基作

濟乘院 (同百十四番地)

開基念蓮社宗心大徳元祿十四巳年十一月六日寂。
本尊地藏菩薩厨子入長三尺一堤 立像満米上人作

朝日阿彌陀如來 子安觀音

靈光院 (同百十五番地)

開基入蓮社鍛譽靈的大徳貞享元年二月十七日寂。
本尊阿彌陀

見松庵 開基三蓮社覺譽一入大徳正徳五年正月廿五日寂。
中興轉蓮社輪譽宅隨大徳享保廿卯年五月十四日寂。
本尊阿彌陀 西國三十三體觀世音

潮江庵 (今は院と稱す同百十七番地)

開基西求大徳寶永五寅年五月廿五日寂。

吟松庵

開基還蓮社本譽意哲大徳寶延二巳年六月廿二日寂。
清澄庵 (今は院と稱す同百十九番地)

開基光譽阿心大徳寶永五子年八月十五日寂。
臨海庵 (今は院と稱す同百二十番地)

開基性蓮社即譽是空大徳安永八年四月五日寂
○當山末寺總而拾三軒御内外に御座候

雲光院

雲光院は。靈岸町百四十二番地に在り。龍徳山と號し。光嚴
教寺と稱す。淨土宗にして京都知恩院の末なり。

慶長十六年の創立にして。開山は潮吞和尚、中興は悅龍和尚
とす。徳川家康公の侍女阿茶局の開基に係る。

當寺初は馬喰町に在りしが。明暦の大火後神田岩井町に轉じ。
天和二年此地に移る。

本堂は瓦葺素木造りにて。棟上に葵章三個を附す。圓光大師
四十八願所第四十四の標示あり。

堂前右に銅佛左に鐘樓あり。南北に蓮池あり。又書院の園池
は風趣に富みて十三層の石塔など見ゆ。

墓域の入口に石門ありて。一山總廟寶石門と刻す。
當寺には阿茶局の木像並に墓あり。庄司甚右衛門の木像も亦

近頃藏置せり。庄司の事は淺草區新吉原の條に詳記せり。其
の墓は當寺墓域の南方住職歴代の墓の側に在りて。願譽淨心

信士、正保元甲申年十一月十八日と刻し。墓石に大字にて庄
司墓とあり。

式亭三馬其の他の墓は別項深川區内有名の墳墓と題する條に
列記す。就て見るべし。

舊支院存するもの七宇。淨慶院(百三十九番地)龍光院(百四
十四番地)照光院(百四十八番地)專受院(百四十五番地)一言
院(百四十一番地)壽光院(百五十一番地)長源院(百五十番地)
是なり。

江戸砂子に云。龍徳山雲光院光嚴教寺 知恩院末寺領五十石
開山還蓮社往譽潮吞信入大和尚

無雙御昵近の侍女阿茶局建立。是を一位尼といふ。

當院佛閣建立の時御上(徳川家將軍をいふ)より材木をくだし
賜る。又黄金二千枚御上の御遺物として。一位尼に賜る。こ
れによつて奉報君恩として。右の黄金を以て建立ある所なり。

慶長十六辛亥年落慶。元和七年西六月十八日後水尾天皇女御
入内。即ち尼公母奉にして。一位に叙せられ 玉座にちかし

よつて國母御間に達し。勅して雲光院の額を賜ふ。二品親王
良恕の御筆なり。是則一位尼公の院號なり。此額當院にあ
り。

發端の地は馬喰町にて。八千坪地を築事五尺六尺なり。鈞命
によつて毛利長門守殿。福島左衛門太夫殿、鍋島信濃守殿築

く。明暦回祓の後同邊にて所替五千八百餘坪に成。天和二回
祓。同三年今の地にうつさる。四千五百餘坪外に四百五十餘

坪は卵塔場。田中徳菴が寄附する所の御年貢地なり。

御朱印の地は。當國豊島郡西ヶ原村の内なり。

開山上人は。當國崎玉郡駒西領上佐久村の産。天正七年生。

氏姓不詳。喜連川御所の臣の末といふ。増上寺十六世觀智國

師の弟子なり。雲光院住職十一年後。洛黒谷金戒光明寺住十
ヶ年。慶安三庚寅四月十三日黒谷塔頭清心院間居にして寂七
十二歳。上佐久村燈明寺も當開山の起立にて當寺の末也。
塔頭 法藏院 淨慶院 良正院 正覺院 一言院 正光院
清心院 長源院 養壽院 仙藏院 傳壽院 樹光院 慈清院
淨徳院 清光院 淨心院 固貞庵

●深川吉永町

◎位置及區域

深川吉永町は。仙臺堀の北畔に在りて一區廓を成し。東は久
永町及び島崎町に對し。西は東平野町と山本町に臨み。南は
河岸地を擁して。仙臺町に限り。北は三好町の一部と吉永町
に界せり。四方水を環らし。東北に入堀あり。土地の番號は
一より七に至る。

◎町名の起原並沿革

深川吉永町は。其の起立東平野町に同じ。元祿十四年九月。
吉田屋藤八、伏見屋龜之助、吉田屋久藏、伊丹屋虎市、伊勢
屋四郎右衛門、小島屋藤七の六人官に請ふて開設したる、市
街地にして、同十六年今の町名を附したり。蓋し祝名ならむ。
正徳三年閏五月町方支配に屬す。明治五年十月に至り。町北
の木置場を併合せり。
里俗に當町を中木場と唱ふ。

●要 橋

要橋は、仙臺堀に架し。吉永町より扇町に連絡す。元祿十五

年十二月兩町の經費を以て架設したるものにして。扇橋に對
して其の名を附したり。
現在のものは。長十八間幅二間半あり。明治三十一年九月の
換架に係る。

●青梅橋

青梅橋は仙臺堀北入堀に架し。吉永町より久永町に連絡す。
創架年月詳かならず。御入用橋箇所書に。文政八酉年入札掛
替。天保十亥年掛替。長幅改。石垣と成とあり。

舊橋は長五間五尺幅七尺なりしが。現在のものは長六間、幅
二間あり。明治三十一年六月の換架に係る。

●富島橋

富島橋は大横川西支川即ち仙臺堀の北横川に架し。吉永町よ
り三好町に連絡す。創架年月詳かならず。
現橋は長さ八間、幅三間あり。明治二十七年七月の換架に係
る。

●深川久永町

◎位置及區域

深川久永町は。仙臺堀の北岸に在りて。東西に細長せる市街
なり。東は河岸地を擁して大横川に枕み。西は入堀を隔て、
吉永町に對し。南は仙臺堀に平衡し。北は島崎町に連りたり。
土地の番號は一より十五に至る。其中第十を缺ぐ。中央に
入堀あり。

◎町名の起原並沿革

深川久永町は。往昔海邊なりしを埋築したる地にして。元祿
十五年正月より商家を建設し。今の町名を附す。蓋し祝名な
らむ。正徳三年閏五月他街と同じく町方の支配に屬す。維新
以前は一丁目二丁目に分ちたりしが。明治四年十月合して一
町とせり。里俗に當町を中木場と唱ふ。

●深川島崎町

◎位置及區域

深川島崎町は。大横川の西岸に在り。東は河岸地を擁して大
横川に枕み。西は入堀を隔て、吉永町に對し。南は久永町に
連り。北は大横川の西支川に界す。陸地東は西に分在し。過
半は入堀なり。土地の番號は一より七に至る。

◎町名の起原並沿革

深川島崎町は。海邊を埋築したる地にして。元祿十五年五月
島居屋茂兵衛北方の地を拂下げ。其の他は同十月冬木屋彌平
次、上田屋十兵衛木置場の代地に給せられし二ヶ所の内にし
て上田屋十兵衛の所有地に係る。同十六年四月今の町名を附
し。正徳三年閏五月町方の支配に屬せり。
里俗に當町を中木場と唱ふ。

●福永橋

福永橋は。大横川西支川入口に架し。島崎町より扇橋町二丁
目に連絡す。創設詳かならず。御入用橋箇所書に。天保二卯
年掛替、同十一子年九月石垣築立、長幅改るとあり。舊橋は

長五間半。幅九尺なりしが。現在のものは長六間、幅二間に
て明治三十七年十月の換架に係る。

●深川三好町

◎位置及區域

深川三好町は。大横川の西位。仙臺堀の北位に在り。東は扇
橋町に連り。西は西永町に接し。南は大横川西支川に堺し。
北は元加賀町に隣れり。陸地は南方に偏在し。大抵は入堀な
り。土地の番號は、五に止る。

◎町名の起原並沿革

深川三好町は。元加賀新田の内にて。茅葺叢生の地なりしが。
元祿十四年六月中川屋佐兵衛、塙屋次右衛門、藤屋伊左衛門、
官に請ふて市店を開設し。同十六年四月今の町名を附したり。
正徳三年閏五月町方の支配に屬す。明治四年に至り。東方な
る海邊新田飛地を併合せり。
里俗に當町を上木場と唱ふ。

●深川西永町

◎位置及區域

深川西永町は。仙臺堀の北位に在り。所謂木場の内にして。
東方は三好町に連り。西は横堀に限り。南方は堀を隔て、吉
永町に對し。北は元加賀町に接せり。土地の區畫は僅かに三
番地あるに過ぎず。

◎町名の起原並沿革

深川西永町は。元加賀新田の内。十間川通り、茅葺叢生の地

此廣告見て御引取の御方「本日名所圖繪廣告」に御附記を乞ふ

關場忠武君編纂 山下重民君校補
浮世繪編年史 全一冊 定價金七十五錢
 送料郵稅金六錢
 本書ハ本邦ニ浮世繪ノ行ハレタル當初ヨリ現時ニ至ル迄ノ沿革ヲ詳叙シ且ツ浮世繪師ノ詳傳ヲ載ス繪畫ニ志アルモノ座右ニ缺クベカラザル櫃要ノ書ナリ
 米華小原重哉先生筆述

王香堂畫譚 全二冊 定價金六十錢
 送料郵稅金六錢
 凡ソ畫ヲ論ヒントセバ人ノ好蹟ニ接ヒザル可カラズ世ノ畫ヲ説クモノ夥多アリト雖モ未タ其神髓ニ及ブモノ稀ナリ本書ハ小原先生種年畫ム所ノ卓説愈出テ愈奇古人ノ未ダ論ヒザル所ヲ啓發シテ遺憾ナシ實ニ古今未嘗有ノ珍書ト謂ベシ
 東宮侍講 本居豐頌大人序
 高貞版 六面入
 銅版圖

人磨考

和裝美本
 定價金壹圓貳拾錢
 郵稅八錢

柿本朝臣人磨は歌を以て世に名高き人なれども其傳を委し記せる書なし關谷先生夙にこれを遺憾として博く諸書に稽へ精しく舊跡を温ねて大に得る所あり千古の疑團煥然氷釋し人磨傳茲に完成せりと謂べし本居先生此書に序して著者年比深く心を盡し博く考へ渡されたる程知られて落る限なく此の懐も無きが如し又歌の論らひ詞の解釋など世人の未だ想へざりし新説を見えていと珍からざる道人の爲に斯ばかり意を盡す人今世には類多からざると思はるれ云はれたる如く當代國史の遺漏を補ふに止まらず歌の講義古言の解釋など皆的確なる考證を擧て懇切に講説せられたり一たび此書を讀めば往昔の人に接して其言語人情風俗を親しく見聞するが如し人磨の事蹟を知らむと欲する人は勿論苟も歌道に志ある人は必ず一讀すべき無比の良書なり

東陽堂發行書籍

畫譜ノ部

- 渡邊華山翁遺墨(木版彩色摺) 定價金壹圓
- 一掃百態 全一冊 郵稅金六錢
- 白龍遺稿 全一冊 定價金壹圓
- 日本勝景 全一冊 郵稅金八拾錢
- 日本名所風俗畫帖 全一冊 定價金五拾錢 郵稅金四錢
- 日本小供遊 全一冊 定價金八拾錢 郵稅金四錢
- 平安名勝畫帖 全一帖 定價金壹圓五拾錢 郵稅金八錢
- 東京名勝畫帖 全一冊 定價金壹圓 郵稅金八錢

佩文齋耕織圖

- 清本繪刻(精工石版彩色摺最大形) 全一冊 定價金壹圓五拾錢 小包二百文迄
- 江亭花鳥畫譜 全一冊 定價金拾五錢 郵稅金貳錢
- 江戶年中行事繪 全一帖 定價金五拾錢 郵稅金四錢
- 松谷花鳥畫譜 第一編 定價金七拾錢 郵稅金四錢
- 松谷漫畫 第一編一冊 定價金四拾五錢 郵稅金四錢
- 寫山要訣 全一冊 定價金壹圓拾錢 郵稅金八錢
- 名蹟撮要(甲、乙、丙、丁)全二冊 定價金壹圓五拾錢 小包四百文迄
- 十二月月短冊 一組 定價金壹圓 郵稅金拾錢
- 十二月月短冊 一組 定價金壹圓 郵稅金拾錢
- 錦乃御旗 全一冊 定價金拾五錢 郵稅金八錢

東海道名所圖會

- 高島得三先生著(繪、印、漆、精工石版彩色摺) 全一冊 定價金八拾五錢 郵稅金八錢
- 歐洲山水奇勝 全一冊 定價金壹圓 郵稅金八錢
- 難福圖卷物 全一冊 定價金五圓 小包四百文迄
- 月耕畫譜 全一冊 定價金壹圓 郵稅金六錢
- 月耕漫畫 全三編 定價金四拾五錢 郵稅金四錢

大日本名所圖會

- 京橋區尾張町 東海堂
- 神田區表神保町 東海堂
- 日本橋區吳服町 東海堂
- 京橋區錦屋町 東海堂
- 日本橋區住吉町 東海堂
- 大坂東梅田町 東海堂
- 京都寺町二條南 東海堂
- 京都佛光寺通東入 東海堂

發行所

- 東海堂 本郷區元宮土町 盛春堂
- 東海堂 神田區神保町 上田屋書店
- 東海堂 京橋區銀座四丁目 春祥堂
- 東海堂 越後國新潟市 北光社
- 東海堂 越後國新發田 澤本治吉
- 東海堂 高知市神戶町 澤本治吉
- 東海堂 名古屋市中區 澤本治吉
- 東海堂 信濃國上諏訪町 澤本治吉
- 東海堂 鹿兒島市仲町 宮坂書店
- 東海堂 下總國水海道 吉田幸兵衛

東京市神田區通新石町三番地
 (電話本局 九七〇番)
東陽堂
 (郵便振替貯金口座番壹九〇〇番)

| 大日本名所圖會 | | 每月一回發行 | |
|---------|-------|--------|-------|
| 冊數 | 定價 | 冊數 | 定價 |
| 一冊 | 金七十五錢 | 一冊 | 金七十五錢 |
| 二冊 | 金七十一錢 | 二冊 | 金七十一錢 |
| 三冊 | 金六十七錢 | 三冊 | 金六十七錢 |
| 四冊 | 金六十三錢 | 四冊 | 金六十三錢 |
| 五冊 | 金五十九錢 | 五冊 | 金五十九錢 |
| 六冊 | 金五十五錢 | 六冊 | 金五十五錢 |
| 七冊 | 金五十一錢 | 七冊 | 金五十一錢 |
| 八冊 | 金四十七錢 | 八冊 | 金四十七錢 |
| 九冊 | 金四十三錢 | 九冊 | 金四十三錢 |
| 十冊 | 金三十九錢 | 十冊 | 金三十九錢 |
| 十一冊 | 金三十五錢 | 十一冊 | 金三十五錢 |
| 十二冊 | 金三十一錢 | 十二冊 | 金三十一錢 |
| 十三冊 | 金二十七錢 | 十三冊 | 金二十七錢 |
| 十四冊 | 金二十三錢 | 十四冊 | 金二十三錢 |
| 十五冊 | 金十九錢 | 十五冊 | 金十九錢 |
| 十六冊 | 金十五錢 | 十六冊 | 金十五錢 |
| 十七冊 | 金十一錢 | 十七冊 | 金十一錢 |
| 十八冊 | 金七錢 | 十八冊 | 金七錢 |
| 十九冊 | 金三錢 | 十九冊 | 金三錢 |
| 二十冊 | 金三錢 | 二十冊 | 金三錢 |

明治四十二年二月十五日印刷
 明治四十二年二月二十日發行

發行所 吾妻建三郎
 印刷所 東京市神田區駿河臺町十一番地
 編輯人 田中市之助
 同市下谷區御徒町一丁目五十五番地

滿洲寫真帖

日露戰役後天ノ大變アルルニ當リ...

繪本風俗往來

著者ハ生粋ノ江戸ヲ見...

名山圖會

宮内省博物館編輯...

新撰書畫

右ハ御物ヲ初メ...

前賢故實

本書ハ嘗テ...

織文圖會

松方原方、本問百里...

雜書ノ部

文學博士藤岡作太郎、平田露次郎先生著

日本風俗史 上、中、下全三冊

日本隨筆索引 全一冊

東洋養蠶新論 増訂再版

ちらしふみ書式 全一冊

緒遂良孟法師碑 全一冊

本朝畫工便覽 全一冊

華山忠孝血淚譚 全一冊

漢邊知三郎君編...

本朝畫工便覽...

華山忠孝血淚譚...

漢邊知三郎君編...

本朝畫工便覽...

華山忠孝血淚譚...

前賢故實

兒セリ傳記ニハ...

圖案模様ノ部

佛利其他ニ...

琉球漆器考

油桶師齋藤...

服色圖解

本問百里...

尚古鍍色一覽

古來ノ遺物...

日本畫沿革史

伯耆宗室石...

日本地理志料

本邦地理ノ...

朝鮮前左議政

朝鮮前左議...

類聚婚禮式

故有任職...

臺陽家内

江原春夢...

造庭圖解

今ハ造庭...

歐陽詢姚恭公墓誌銘

米善原重...

王香堂書譚

凡ソ書ヲ...

集古十種

御幸之部...

繪畫哲學論

顏真卿放生池帖

外征錄

支那外征錄

竹田と華山

日本畫沿革史

臺灣家内

江原春夢...

造庭圖解

今ハ造庭...

歐陽詢姚恭公墓誌銘

米善原重...

王香堂書譚

凡ソ書ヲ...

繪畫哲學論

顏真卿放生池帖

外征錄

支那外征錄

竹田と華山

日本畫沿革史

臺灣家内

江原春夢...

造庭圖解

今ハ造庭...

テ本心書ハ古ヨリ傳リタル法式トテ...

小笠原島志 全一冊 五百五十餘頁...

浮世繪編年史 全一冊 郵税金七拾五錢...

征露圖繪合本 各卷一冊 定價金八拾五錢...

仙郷奇談 全一冊 定價金七拾五錢...

喜劇集 定價八十五錢 郵税金八錢...

下「保險嫌ひ」ハイカラ式 美本 郵税金八錢...

近世女風俗考 全一冊 定價金五十八錢...

魏張猛龍碑 木版摺本一冊 定價金七十錢...

秩桑書畫印集覽 全一冊 定價金一圓十五錢...

風俗畫報 全一冊 定價金一圓十五錢...

繪畫叢誌 第一卷出版 明治廿二年...

繪畫叢誌 第二卷出版 明治廿二年...

繪畫叢誌 第三卷出版 明治廿二年...

御所の園 全一冊 定價金六十錢...

習字法 全一冊 定價金二十五錢...

人解剖圖 全一冊 定價金四圓七拾錢...

人磨考 (和裝美本) 定價金壹圓貳拾錢...

繪畫叢誌 第四卷出版 明治廿二年...

繪畫叢誌 第五卷出版 明治廿二年...

繪畫叢誌 第六卷出版 明治廿二年...

はのじのぞやうこ告廣

貴顯紳士粹佳人の必用なる香料

東京星野の人造麝香

弊舖發賣の人造麝香は他に比類なき純良品にて高尚優美の芳香を放ち方今昔く天品に冠たる高評を博したり常に此人造麝香を携帶せば總ての悪臭を防ぎ他人に對身の着儀となり悪疫の感染を豫防し衛生的夏季最も必用の佳品也
繁舖の人造麝香は香水香油石鹼及化粧品製造業者間に必用なる用料として歡迎せらるる近來種々の廉製品あり注意の上御求め



香具原料に用ふる 純潔代用定 大瓶六拾五錢
七匁五分入及び 一割増し 小瓶參拾五錢
一匁入は時價を 恒し運送 新小瓶貳拾錢
以て精々勉強す 料は不用價 試用拾錢

日本發賣元 東京市日本橋區 星野與兵衛
特約店 伊勢町十七番地
關西一手販賣 大阪市東區 武田長兵衛
地方一手販賣 道修町二丁目
代理店 同市同區道修町現番所 小川安兵衛
全國到處の藥店並に小問物店にて賣捌候
登錄商標御注意を乞

東陽堂發賣地圖目錄

農商務省地質調查所編製

近畿通省鐵道局御藏版
大日本鐵道線路圖 全一部
定價 一圓七十五錢 送料六錢

百一萬 大日本帝國地質全圖 十五部
定價 金壹圓 郵稅 金六錢

百一萬 大日本帝國地質說明書 洋裝全一冊 定價 金壹圓 郵稅 金六錢

百一萬 大日本帝國地質略圖 全四枚 定價 金壹圓 郵稅 金六錢

四十萬 大日本豫察地質圖 全國五部各一部 定價 金壹圓 郵稅 金六錢

四十萬 大日本豫察地質圖 全國五部各一部 定價 金壹圓 郵稅 金六錢

二十萬 大日本地質詳圖 全國九十九部各一部 定價 金壹圓 郵稅 金六錢

二十萬 大日本地質詳圖 全國九十九部各一部 定價 金壹圓 郵稅 金六錢

十萬 大日本地質詳圖 全國九十九部各一部 定價 金壹圓 郵稅 金六錢

十萬 大日本地質詳圖 全國九十九部各一部 定價 金壹圓 郵稅 金六錢

北海道應實測
北海道地形圖 全一折
定價 一圓八十錢 郵稅六錢

東陽堂發賣
圖書目錄郵

農商務省地質調查所編 地質調查所報告

第一ヨリ第七迄既刊以下漸次發刊

| | | | | | | | | | |
|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|------|------|------|
| 無仕立 | 折本 | 仕立 | 仕立 | 仕立 | 仕立 | 仕立 | 仕立 | 仕立 | 仕立 |
| 金四圓 | 金五圓 | 金六圓 | 金七圓 | 金八圓 | 金九圓 | 金十圓 | 金十一圓 | 金十二圓 | 金十三圓 |

| | | | | | | | | | |
|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|------|------|
| 無仕立 | 折本 | 仕立 | 仕立 |
| 金三圓 | 金四圓 | 金五圓 | 金六圓 | 金七圓 | 金八圓 | 金九圓 | 金十圓 | 金十一圓 | 金十二圓 |

和交 金一圓 金二圓 金三圓 金四圓 金五圓 金六圓 金七圓 金八圓 金九圓 金十圓 金十一圓 金十二圓 金十三圓 金十四圓 金十五圓 金十六圓 金十七圓 金十八圓 金十九圓 金二十圓 金二十一圓 金二十二圓 金二十三圓 金二十四圓 金二十五圓 金二十六圓 金二十七圓 金二十八圓 金二十九圓 金三十圓 金三十一圓 金三十二圓 金三十三圓 金三十四圓 金三十五圓 金三十六圓 金三十七圓 金三十八圓 金三十九圓 金四十圓 金四十一圓 金四十二圓 金四十三圓 金四十四圓 金四十五圓 金四十六圓 金四十七圓 金四十八圓 金四十九圓 金五十圓 金五十一圓 金五十二圓 金五十三圓 金五十四圓 金五十五圓 金五十六圓 金五十七圓 金五十八圓 金五十九圓 金六十圓 金六十一圓 金六十二圓 金六十三圓 金六十四圓 金六十五圓 金六十六圓 金六十七圓 金六十八圓 金六十九圓 金七十圓 金七十一圓 金七十二圓 金七十三圓 金七十四圓 金七十五圓 金七十六圓 金七十七圓 金七十八圓 金七十九圓 金八十圓 金八十一圓 金八十二圓 金八十三圓 金八十四圓 金八十五圓 金八十六圓 金八十七圓 金八十八圓 金八十九圓 金九十圓 金九十一圓 金九十二圓 金九十三圓 金九十四圓 金九十五圓 金九十六圓 金九十七圓 金九十八圓 金九十九圓 金一百圓

農商務省地質調查所編 地質要報 第一號

定價金壹圓六十錢 郵稅金八錢

延命定丹

定價 百粒入十錢 二百粒入廿錢 五百粒入五十錢 一千粒入一百錢

胸膈の痛を去り心悶鬱閉を散じ頭痛時暈留飲を治し吐瀉痢病を止め舟車魚肉の醉痰咳過酒の苦を忘れし殊に毎食後服用すれば食あたり食物停滯胃病の患なく精神爽快ならしめ百事勤勵心を誘起せしむる良藥也同名又似寄の偽藥數多有商標及いとや號に御注意を乞

本舖 東京市馬場町 いとや又兵衛

てんかんの最新藥

蘇神丸 藥價 百日分 金參圓(送料八錢) 三日分 金三圓(送料二錢)

本舖 東京市日本橋區 藥劑師 高木與八郎